

---

# 遊戯王 G X    ~ 無限の地獄 ~

しゃれこうべ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

遊戯王GX ～無限の地獄～

### 【Nコード】

N2610P

### 【作者名】

しゃれこつべ

### 【あらすじ】

シンクロって・・・なんだよそれ・・・

正直乗り気じゃねえが、あの人の顔を立ててやるかな。

しっかしデュエルアカデミアか・・・満足させてくれよ？

## 第一話 入学試験、そしてデュエル！！（前書き）

初投稿です。

遊戯王のSSを見て、自分でも書きたいとおもって書きました。

下手な文ですが、宜しくお願いします

感想、まっています。

## 第一話 入学試験、そしてデュエル!!

「・・・・・・・・」

はぁ・・・・・・・・帰りたい・・・

「これで終わりだ!!、トライホーンドラゴンの攻撃!!」

「うあああああ!!」

LP12000

「ありがとうございました・・・」

試験官負けた生徒はトボトボと段を降りていった。

「ふん、まったく・・・骨のある奴はいないのか?次、試験番号5番!!」

俺だ・・・。

「・・・・・・・・はい」

鬱だ・・・なぜ俺がデュエルアカデミアなぞに・・・

~~~~~

時は遡り、一週間前・・・

俺はある人に呼ばれ、その場にいた。  
そしてそこで重大なことを言われた。

「は？」

「聞こえなかったのか？デュエルアカデミアに行けと言っているのだ」

そんなことはわかっている。

「・・・なぜです?」

目の前の男は後ろを向いたまま、淡々と言う。

「今、我が社は新たな発展を見せようとしている」

「・・・・・・」

「それはおそらく、このデュエル界を大きく変化させることだろう  
!」

「・・・・・・」

「その新たな発展・・・それは『シンクロ』だ!」

「・・・シンクロ?」

この人が言うことを俺はさっきからずっと聞き流していたのだが、そこで少し興味を持った。

「ふうん・・・やはり気になるだろう？」

「・・・まあ」

「よからう、では教えてやる！！・・・まず、シンクロというのはチューナーというー」

そこで俺は偉そうに説明をするこの人の話を聞いていた。

シンクロ・・・それはカードの新たな可能性。  
チューナーと呼ばれるモンスターから生まれる特殊な召喚。

説明された話を簡潔に述べるとこな所だろう。

「だがこのシステムにはまだ不備がある・・・そこで、お前にはこのデッキを使い、  
デュエルアカデミアに入学してシンクロのテストをしてもらおうというわけだ！！  
・・・受け取れえ！！」

「っ」

そっいつて俺にデッキケースを投げってくる。パシッと片手でそれを取り、中を見てみた。

「・・・なんだこのカードは？」

今まで見た事のないカードばかり・・・だった。

「そのデッキはシンクロの為のデッキ、試作品だ。  
つまりそのデッキは世界に一つしかない、お前のデッキだ」

「・・・・・・・・」

「手続きはもう終わらせてある・・・行くがいい!!  
行って我が社の結果を見せびらかせろッ!!!」

~~~~~



「つーわけで今俺はデュエルスペース？・・・ようするに広場の真ん中  
にいる。」

目の前にいるのはごついおっさん。試験官だな。

「さて・・・次は貴様だな？」

新たな獲物を見つけたような目でこちらを見てくる。  
止めるよ気持ち悪い・・・

「さっさと終わらせるぞ・・・デュエル!!」

「デュエル・・・」

正直やる気はほとんどねえけど・・・ま、あの人の頼みだし、仕方  
ないか

試験官      LP4000

???      LP4000

「私のターンからだ!!、ドロー!!」

んなかつこつけてドローすんなよ・・・カード痛めるぞ？

「私は手札から《クリッター》を守備表示で召喚!!」

場に三つ目のきしよいモンスターが現れる。

「カードを一枚セット・・・ターンエンド!!」

試験官 手札 4

クリッター（守備）

伏せ 1

さて・・・俺のターンか

「ドロー」

普通にドローする。

居合い抜きのような腕を大きく振り回すドローなんてしないよ？

「・・・・・・・・・・」

相手の場と手札を見ながら展開を考える。

クリッター・・・墓地に行ったときに攻撃力1000以下をサーチするモンスターか。

そして伏せが1・・・。

様子見もいいが・・・ここは相手の出方を見るところ

「俺は手札から、《インフェルニティ・ビースト》を召喚っ」

首辺りに緑の玉のようなものをつけた犬が現れる。

俺のモンスターを見るやいな、会場が少し騒ぎ出す。

「なんだ？あのカード？」「かつこいいなあ」「インフェルノ？」  
「うお～～！！見たことのないカードだ！！」「兄貴、うるさいっす・・・」

・・・ま、見たことがないのは当たり前だろうな・・・これ世界に1枚しかないんだし。

インフェルニティ・・・それが俺があの人にもらったデッキだった。こいつらのカード群は面白い効果を持っているんだが・・・それは後のお楽しみだな。

「・・・バトル」

うかつにカードを出せばアドを取られてしまう可能性がある。

・・・ここは慎重に、だな。

「《インフェルニティ・ビースト》で、クリッターに攻撃、ヘル・ハウリングー!!」

突進し、爪でクリッターを切り裂くと、あっけなくクリッターは破壊された。

「ふん・・・この瞬間クリッターの効果を発動!!デッキから《マシマロン》を持ってくる!!」

壁モンスター・・・どうでもいいさ・・・。

「・・・・・・・・・・ターンエンド」

??? 手札 5

インフェルニティ・ビースト

伏せ0

「私のターン！！・・・ほう・・・これはこれは」

なんだ？良いカードでも引いたか？

「私は《マシユマロン》を守備表示で召喚！！」

場に文字通りマシユマロのようなモンスターが現れる。

・・・？マシユマロンを表守備？なぜだ？

「ふふふ・・・次のターンを楽しみにしておけ・・・ターンエンド！！」

試験官 手札 5

場 マシユマロン

伏せ 1

「・・・・・・・・・・ドロー」

どんな考えがあるか知らんが・

「・・・・・・・・・・」

さて・・・・どうやらマシユマロンを表で出したのはプレイングミスではないようだ。

とすると次のターンのモンスター召喚のための布石？

だがそれでは表で出す意味がわからない。

となると気になるのは奴のリバースカードだな。

「・・・・・・・・・・手札から速攻魔法、《サイクロン》を発動、その伏せを破壊する」

気になる。ならば除去。簡単だ。

だが相手の試験官は俺がサイクロンを発動したのを見て笑う。

「ふふふ・甘いなあ・・・貴様が破壊したカードは・・これだ!!  
リバーズカードオープン!! 《弱肉強食》!!」

伏せられていたカードが開かれた。

「・・・《弱肉強食》？」

「このカードはセットされた状態で破壊され、自分の場に攻撃力500以下のモンスターがいるときに発動する!!」

破壊されることで効果を得るカード・・か。

この発動条件を満たすため、マシユマロンを表で出したのか・・。マシユマロンは戦闘耐性を持つ・・よってこのカードを破壊してくるのは解っていたということか。

「このカードの効果は、自分の場のモンスター一体を手札に戻すことで、手札からLV4モンスターを一体、特殊召喚することが出来る!!」

来い!!、《レインボーフィッシュ》!!」

マシュマロンが光となって消え、変わりに七色に輝く魚が姿を現した。

「さらに、このカードが相手によって破壊された場合・・・相手はラダムに手札を一枚捨てなければならない！！  
さあ、一枚墓地に送れ！！」

「ち・・・・・・・・」

俺は手札を裏返し、軽くシャッフル。そして一枚を選び、墓地に送った。

「うかつに破壊したのが間違いだったなあ？・・・新人生君よ？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

インフェルニティ・ビーストの攻撃力は1600・・・レインボーフィッシュの1800には届かない・・・か。

「・・・俺はカードを一枚伏せ、ターンエンド」



??? 手札 2

場 インフェルニティ・ビースト

伏せ 1

「私のターン、ドロー！……手札から、《シーザリオン》を召喚！！」

シーザリオン ATK 1800

今度はウツボに似たこれまたきしよいモンスターが出てきた。

「バトルだ！！……《シーザリオン》で、《インフェルニティ・ビースト》に攻撃！！  
アクアショット！！」

させるかよっ

「永続トラップ発動、《デプス・アミュレット》！！」

「むう！？」

IFビーストの前に奇妙なアミュレットが現れる。

「このカードは、相手の攻撃を手札一枚捨てることにより無効にするカード・・・」

手札を一枚捨て効果を発動、《シーザリオン》の攻撃を無効」

口から何かを発射しようとしていた《シーザリオン》はそのまま何もせず、元の態勢に戻る。

「ならばもう一度だ！！《レインボーフィッシュ》で攻撃！！」

「再び《デプス・アミュレット》の効果を発動、手札を捨て、攻撃を無効！」

再び攻撃を無効化する。

・・・これで俺の手札は0になった。

「そこまでしてそのモンスターを守りたいのか？・・・カードを二枚伏せ、ターンエンド！！」

試験官 手札 3

場 シーザリオン ATK 1800

レインボーフィッシュ ATK 1800

伏せ 2

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

俺の場にはIF・ビースト、そして永続トラップのデプス・アミュレットのみ。

手札は0・・・さあて、あのカード引けるかなつと。

「ドロー・・・・・・・・《強欲な壺》を発動」

この場合には来て欲しくはなかったカードだぜ・・・。  
俺は山札から2枚ドローする。

「デッキから2枚を引く・・・・・・・・ち」

お前かよ・・・ま、いいがな。

「俺は場の《IF・ビースト》を生け贄に捧げ・・・」

IF・ビーストは足から消えていく。

「現れる・・・《インフェルニティ・デストロイヤー》！」

IF・デストロイヤー

ATK2300

そして現れるのは奇妙な姿の巨人・・・デストロイヤーという名がふさわしい。

こいつが出るとまた会場は騒ぎ出す。

「なんだ・・・このモンスターは・・・」

あんたも驚いてんじゃねえよ・・・これ事故なんだからよ。

「バトルだ・・・《IF・デストロイヤー》で、《シーザリオン》を攻撃！！

デストロイ・スラッシュ！」

その手に付いている大きな爪でシーザリオンを切り裂く。

「くう・・・！」

試験官   LP4000   3500

「・・・ターン、エンド」

???   手札1

場   IF・デストロイヤー

デプス・アミュレット

「たかが500・・・痛くも痒くもないわ！、私のターン！！」

シュッと、格好つけてドロー。なにがいいんだろうね、一体？

「それがお前の切り札か？・・・たった攻撃力2300なんぞ、私の敵ではない！！

見るがいい・・・これが切り札というものだ！！

私は、《レインボーフィッシュ》を生け贄に捧げ・・・来い！！、《ジェノサイドキングサーモン》！！」

レインボーフィッシュが消え、鮭が現れた。  
鮭だぞ鮭。

「ふふふ・・・」

「・・・どうしました？」

「お前はおそらく、そのトラップで今の場をしのぐつもりだろうが・・・そうはいかんぞ！！

手札から、《死者蘇生》を発動！！、墓地の《シーザリオン》を、特殊召喚！！」

再び現れるシーザリオン。

「さらにトラップ発動！！《水霊術 葬》！！

このカードは、自分の場の水属性モンスターを一体生け贄に捧げ、相手の手札を一枚捨てさせるカード！！」

《シーザリオン》を生け贄に捧げ・・・さあ、その一枚も捨ててもらおう！！」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

俺は一枚だった手札を墓地に捨てる。

「これであのトラップは発動できまい・・・バトルだ！！、《ジェノサイドキングサーモン》で、

《IF・デストロイヤー》を攻撃！！ ジェノサイドアップ！！」

まるで泳ぐように空間を進み、その尾ひれをIF・デストロイヤーに叩きつけた。

「ち・・・・・・・・」

??? LP 4000 3900

「更に速攻魔法発動！！《滝登り》！！！！

自分の水属性モンスターが相手モンスターを破壊したとき、500

ポイントのライフを払うことによって魔法、罫カードを一枚破壊することができる――！

私は500ポイント払い・・・デプス・アミュレットを破壊――！

試験官   LP3500   3000

「はははは――！どうだ――！貴様の場にはもうモンスターはいないぞ？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「壊す（デストロイ）なぞ甘い・・・物事は全て<sup>ジェノサイド</sup>集団殺害。完璧に殲滅するべきなのだ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「ふん、だんまりか・・・カードを一枚伏せ、私はターンエンド！」

試験官   手札1

場   ジェノサイドキングサーモン



伏せ1

「・・・・・・・・俺のターン」

俺のフィールドには何も無い・・・そして相手の場には攻撃力2400のモンスター・・・。

引け・・・あのカードを。

「・・・・・・・・・・ドロー!」

引いたカードを見る。

・・・・・・・・。

・・・・・・・・。

・・・・・・・・。

・・。

来たぞ・・・やっとな。

「俺が引いたカードは・・・《インフェルニティ・デーモン》だ」

「?・・・なんだそれは？」

「このカードは自分の手札が0枚時にドロースた時、このカードを相手に見せる事で自分フィールド上に特殊召喚することのできるカードだ」

「!!なんだと!？」

「俺の手札は0・・・よって、現れろ、《IF・デーモン》!!」

山羊のような顔をした顔をし、魔術師のようなローブを纏った状態でIF・デーモンは現れた

「さらに・・・このカードが特殊召喚に成功した時、自分の手札が0枚の場合、自分のデッキから「インフェルニティ」と名のついたカード1枚を手札に加える事ができる!!」

「!!」

「俺が手札に加えるカードは・・・《インフェルニティ・ネクロマンサー》」

「・・・・・・・・・・むう、また妙なカードを・・・」

「俺はまだ召喚を行っていない・・・よって、手札より、《IF・ネクロマンサー》を召喚!!」

さて・・・行きますか？

「《IF・ネクロマンサー》の効果を発動・・・自分の手札が0枚の時、自分の墓地に存在する《インフェルニティ》と名の付いたモンスターを一体、特殊召喚することができる!!」

現れる!!、《インフェルニティ・デストロイヤー》!!」

再び現れるIFデストロイヤー。

「く・・・フィールドも手札も0の状態からここまでするとは・・・  
だがお前のモンスターの攻撃力では、  
俺のジェノサイドキングサーモンを倒すことはできんぞ!!?」

「問題はない・・・行くぞ」

「なに!？」

「墓地に存在する、《ADチェンジャー》の効果を発動!!  
このカードを除外することによって、フィールドのモンスター一体  
の表示形式を変更する!!  
俺は《ジェノサイドキングサーモン》の表示形式を、守備に変更!  
」

「ばかな・・・《ジェノサイドキングサーモン》の守備力は1000  
0・・・

これでは破壊されてしまう!!」

Zサーモンは背を丸くし、防御の態勢をとる。

「バトルだ……《IF・デストロイヤー》で、《Zキングサーモンを攻撃!!》」

ズシャアと、Z・キングサーモンは切り裂かれた。

「く!!……だがここでトラップを発動!!、《魚の散乱》!!自分の水属モンスターが戦闘で破壊された時、次の自分のターンに、そのモンスターを特殊召喚することができる!!  
ははは、貴様のそのモンスターの攻撃を喰らっても私のライフはまだ1200ポイント残る……。  
そして貴様の場には最高攻撃力2300のモンスターのみ!!次のターンでお前のモンスターを全滅させてやろう!!」

「……哀れだなあ。」

「無駄つすよ……あなたに次のターンはありません」

「?……何を言っている?」

「あなたは《IF・デストロイヤー》の効果知らない」

「効果だと……?」

そう・・・こいつの効果は・・・

「《ジェノサイドキングサーモン》を破壊したことにより、《IF・デストロイヤー》の効果を発動!!」

自分の手札が0枚の時に相手モンスターを破壊し、墓地に送った場合・・・相手に1600ポイントのダメージを与える!!」

「!!!!!!なんだとお!!!!!!」

「さっきこいつで破壊したときは手札が1枚あったため発動出来なかったが・・・これが俺の神髄、『ハンドレスコンボ』だ

「ハンドレス・・・コンボ・・・」

「さあ・・・1600ポイントのダメージを受けるがいい・・・」

「ひ、ひい・・・」

IF・デストロイヤーは試験官の前に行き、そしてその爪で大きく試験官を切り裂いた。

「ぐわああああ!!」

試験官   LP3000   1400

「止めた・・・《インフェルニティ・デーモン》の攻撃!!  
ヘル・プレッシャー!!」

空間に魔法陣が出現し、そこから炎で覆われた巨大な手が試験官を襲う。

「ぐはああああああ!!!!」

試験官   LP1400   0

「あんたの・・・負けさ」

~~~~~

ま、ついことがあったわけだ。

あの後静まりかえった会場を後にし、あとは結果が出るのを待つだけだった。

なんか遅刻してきた生徒がどうか騒いでいたようだが・・・どうでもいいだろう。

そういえば・・・俺が会場を出ようとするところとある人物と視線がぶつかった。

長い青色の髪・・・ほかの生徒とは違う制服・・・誰だこいつは？

しばらく俺はそいつを見ていたが、たいして興味もないのでそのまま帰っていった。

そして結果。

俺の色は青・・・オベリスク・ブルーだったか？

デュエル・アカデミアの一番上の位になったわけだ。

「・・・・・・・・・・・・・・・・これで満足か、『海馬社長さんよ』」





## 第二話 デュエルッ！《E・HERO》使い（前書き）

デュエルの内容を考えるのは好きです。

学校で腐るほどやってるんですが戦術とかはわかりません。

12月5日

ちよいとかみ合わない描写がございましたので修正しました。  
（手札の枚数など）

## 第二話 デュエルッ！〈E・HERO〉使い

『ふん・・・そのデッキならばD Aの試験官ごときに負けるはずがなからう、勝って当然だ』

「・・・デュエル中の視線がうつと惜しかったですけどね」

試験が終わり、翌日、晴れてオベリスクブルーの生徒となった。  
俺は寮の鍵をもらい、ジェラルミンケースを片手に社長さんと電話で通話している。

『それはそうだろうな。なんせ我が社初のシンクロのデッキなのだからな！-！』

「・・・とは言ってもシンクロモンスターがなければどうしようがありませんが？」

この人、シンクロデッキとか言っておきながらいざ確認してみると用心のシンクロとかいうカードが入っていなかった。

それで話をしているうちに寮についた。

123号室・・・ここか。もらった鍵を差し込み、扉を開ける。

「・・・・・・・・・・ひろっ」

尋常じゃない広さ・・・これが寮かよ・・・

『それは問題ない、昨日磯野によってカードを送らせた。おそらく、もうお前の部屋に届いているはずだが?』

「?・・・・・・・・ああ、これですか」

見ると部屋のベッドの上に四角い小包が置いてあった。

俺はジェラルミンケースをテーブルに置き、その箱を開ける。

「・・・・・・・・・・これは・・・」

中に入っていたのはもちろんカード・・・。

だがそのカードは今までにみたことのない色をしていた。

「白……これがシンクロモンスターですか？」

『そのとおりだ、そのカードが未来を変えらるというわけだ』

「……………」

入っていた枚数は3枚のモンスターカード。

「《スターダストドラゴン》、《レッドデーモンズドラゴン》、《ワンハンドレッドアイドドラゴン》  
……………すごいな」

どれも綺麗な絵柄だった。

全てがドラゴン族というところが社長らしいといつかなんといつか……。

『世界に一枚しかない……お前だけのカードだ……存分に使うがいい！』

「……ありがとうございます、社長」

でもなあ、正直こんなものもらっても将来使うかどうか・・・  
ああ、そういえばどっかの町に蟹みたいな髪をした子供がいたな、  
そいつにでもあげようかな。

いや、でも3枚もあげるのはもったいないし・・・あ、別の町にま  
たへんなガキいたな。

なんか『ぼくはしょうらいマジック・アンド・ウィザーズの王者<sup>キング</sup>に  
なるんだ！』とか言ってたし、そいつにもあげよう。

『礼などいい、お前はこの俺、「海馬瀬戸」の養子なのだからな、  
「京介」よ』

「・・・・・・・・・・」

そう、俺はこの人についていった人間。  
前の名前は捨てた、今の俺は【海馬 京介】だ。

『そろそろ仕事があるので切る、うまくやるがいい・・・俺はお前  
を買っているのだから・・・プッ』

「・・・・・・・・・・読めない人だ。  
・・・さて。」

携帯電話を耳から離し、ポンつとベッドの上に投げる  
そしてジェラルミンケースからデッキを取り出し、テーブルにカードを広げる。

知らない人はいないと思うが・・・一応俺のデッキに入っているインフェルニティを簡単に教えておこう。

まず《インフェルニティ・ビースト》

手札が0の時にこのカードがバトルしたとき、相手はダメージステップまで魔法、罠を発動させない効果をもつ。  
攻撃力も1600と、まあ普通だ。

次、《インフェルニティ・デーモン》

手札0でこのカードをドローした場合に特殊召喚できる。さらに手札が0の時に特殊召喚されたとき、デッキから《インフェルニティ》と名の付いたカードをサーチすることができる。

このデッキの中心核となるカードだ。攻撃力は1800。高いほうだ。

NEXT、《インフェルニティ・ネクロマンサー》

手（ry墓地から《インフェルニティ》と名の付いたモンスターを特殊召喚することのできるカード。

攻撃力は0だが守備力は2000と高い。

最後、《インフェルニティ・デストロイヤー》

（ryモンスターを破壊したとき、相手に1600ポイントのダメージを与える効果だ。

LPは4000で1600削れるのはとてもいい。

攻撃力も2300と、半上級モンスターには敵わないが、下級モンスターなら破壊できる。

昨日出したのはこんなところだ。

これ以外にもまだカードはあるが・・・全部説明するとあんた達も飽きると思うし、飛ばされたら意味ないので楽しみにしてくれ。

「レベルの合計が8か・・・」

インフェルニティのチューナー確認・・・。

あるのはレベルが2の《インフェルニティ・ビートル》、レベル1の《インフェルニティ・リベンジャー》

ということはいつらを使って・・・ん？

まてよ？ビートルのレベルが2ということは、このカード以外で6にしなければいけないのか？

さて・・・6の組み合わせ・・・IF・ネクロマンサーの3と《IF・ドワーフ》の2、そして《IF・リローダー》・・・。



「…………だめだ」

これじゃ展開に時間が掛かる……もっと簡単なものは……  
デーモンの4とドワーフの2だな。

ふむ……難しい。

コンコンッ

そんな感じでデッキの解析と構築をしていると、ドアのノックする音が聞こえた。

「？誰だ？」

このオベリスクブルーの寮、異様に設備がいい。  
なので玄関にカメラがついているので、そこから外の様子を見た。

「…………女？」

いたのは長い金髪の女。腕を組んでドアをじっと見つめている。

「……………」

ま、追い返す意味もないか。  
俺は玄関まで行き、ドアを開いた。

「初めまして・・・かしら？」

するとその女はクールな笑みを浮かべ、

「私の名前は天「ガチャンッ」・・・ええっ!？」

何か言い出す前に俺はドアを閉じた。追い返さない。でも招き入れない。

ははは、俺って最高!!

『ちよっと!?!いきなり閉めるなんて失礼よ!』

ドンドンとドアを叩く音が聞こえる。  
おいおい壊れるだろうが。

「今取り込み中だ、用事なら後にしてくれ」

『え、そうなの・・・って、じゃあ先にそう言いなさいよ!..!』

「・・・そうだったな」

『そうだったって・・・はあ・・・じゃあまた出直すわ・・・』

諦めたのか、もうドアの向こうにあの女の気配はなくなった。  
さて、速いところ終わらせねえとな・・・

俺はまた構築作業に戻った。

~~~~~

「ちああ!..!デュエルしようぜ!..!」

「・・・あね?..!」

翌日、なぜか俺はオシリスレッドの奴とデュエルするハメになってしまった。

まあ簡単に説明するでしょう。

ただ作者が描写書くのがだるいってわけじゃないぞ？

授業終わる

変な奴「昨日の凄いやつだな！？、俺とデュエルしようぜ？」

は？

「俺は遊城十代、オシリスレッドで、ここのナンバー1だ！！」

いや自己紹介してんじゃなくて？

とりあえず、デュエルしようぜ！！

あゝれゝ？

それで無理矢理会場に連れてこられ、デュエルすることに。

「いきなりデュエルって……確か遊城……だったか？」

「十代でいいぜ、．．えつと．．．」

ああ、名前言ってなかった。

「俺はか．．．．．」

「．．．．．か？」

待て。

待て待て。

考えろ、もしここで俺の名が海馬だと言ったら？  
．．．．．うわ、めんどくさいことなりそ〜。

遊城．．．．．おっと、十代だったな。

十代は俺が名前を言うのを待っているようだった。

えつと．．．．．偽名でいつか。

書類関係は社長にでも任せるとしませよ。

「か．．．．．か．．．．．か、か、『かんばる神原 京介』だ」

咄嗟に思いついた名前。ま、問題ないっしょ。

「京介か！、よろしくな！！」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

てめ、せっかく人が考えた名を呼ばねえで性で呼ぶってどうよ？

「・・・・・・・・ああ、よろしく。・・・それで？デュエルするのか？」

「おう！、じゃ、いくぜ！！」

「・・・・ま、デュエルは嫌いじゃない、やってやるさ！」

カシャーンと自動でデュエルディスクが展開する。  
毎度思ってるんだがあれってどいう仕組みなんだろうな？

「「デュエル（ー！）」「」

京介 LP4000

十代 LP4000

「先行はお」 「先行はもらっぞ? . . . ドロー」 . . . ええっ!

先行は言っ たもん勝ちさ。

「 . . . . . 」

ふーむ、あまりいい手札じゃねえなあ。 まあ、これかな。

「手札から、《強欲な壺》を発動、デッキからカードを2枚ドロ」

シャシャつと二枚引く。 . . . . . ううむ? 普通?

チラッと十代を見ると、アイツは自分の手札を見ながらニヤニヤしていた。

「いいカードでもきたか? 」

俺の質問に十代は隠すことなく満面の笑みで答えた。

「ああ！！、京介に対抗できるくらいの、すっげえカードがきだぜ！！」

「そうか」

よし、ならばこれだな。

「手札から魔法、《手札抹殺》を発動、効果は・・・言わんでもわかるな？」

「ちよっ！？」

これ、俺がよくする戦術という名のズル。  
別に答えなくてもいいんだし、今回は十代、お前のミスだぜ。

「そりゃあねえよ・・・」

ぶつぶつ文句を言いながら十代は手札を全部捨てた。  
えーっと、エッジマンにバブルマン・・・スカイグラスパー・・・あつぶね！！

てか《E・HERO》か。ま、十代らしいな。



さて、俺も捨ててドローっとな。うん、こりゃまた普通かな。

「俺は手札から、『インフェルニティ・デーモン』を召喚」

ブーンと、ソリットビジョンでモンスターが現れる。  
こいつは墓地にいなえとあんま意味ないしね。

「おお！！かけえ！！！」

俺のデーモンを見て十代は目を輝かせている。  
・・・かっこいい？

「カードセット・・・こんなもんか、ターンエンド」

京介 手札 4

場 インフェルニティ・デーモン

伏せ 1

「おっしやあ!! 気を取り直して・・・俺のターンだ!!」

ちょ、お前もそのドロの仕方がよっ!

「俺は手札から、融合を発動!!」

手札のフェザーマンとバーストレディを、融合!!」

手札融合!?!?! お前、デッキが40枚としても指定の素材と融合が来る確率40分の3だぞ!?!  
どんだけ引きいいんだよ。。。

「いつくぜえ京介!!、現れろ!!、《E・HEROフレイムウィングマン》!!」

E・HERO フレイムウィングマン

ATK2100

「・・・・うつはー」

これがフレイムウィングマン・・・・かつこいい・・・・か?

「更に通常召喚で、こいつを出すぜ!!」

現れる!!、《E・HEROスパークマン》!!」

E・HEROスパークマン

ATK 1600

「悪いが京介!!このターンで決めさせてもらっぜ!!」

え?・・・あー、フレイムウイングマンでデーモン破壊、300くらっつえー、

さらに効果で1800喰らっつ・・・そして1600のダイレクトか。

・・・ん?

待てよ?

300+1800+1600=?

小学生でもわかる、3700だ。

だから俺がこのラッシュを喰らっても300残るんだが・・・

あ。

・・・気づいた？

俺はもう気づいたよ。

うん、そうだよ、社長も俺とデュエルしたときよくしてた。

そう、正解、《融合解除》だね。

・・・ってやつべえ！？

「いくぜ京介！！、バトルだ！！、フレイムウイングマンで、《インフェルニティデーモン》を攻撃！！

フレイム・シュート！！」

やば、本当ならもつと遅く発動する予定だったけど、しゃーねえ！！

「畏、発動！！《デプス・アミュレット》！！

手札を一枚捨て、《フレイムウイングマン》の攻撃を無効にする！」

右手からなにか火炎放射的なものを発射しようとして、《フレイムウイングマン》はそのまま何もしなくなる。

「それは・・・あの時のカードか！！」

「そうだな、結構便利なんだぜ？これ」

「つく~~~~！！、やるなあ！！全員の攻撃で終わらせるつもりだったのに！」

やっぱり何かするつもりだったのね・・・ってこいつまさか計算間違えたのか？

・・・・・・まさかなあ？

「んじゃ、カードを一枚伏せて、ターンエンドだ！！」

あ、こいつスパークマンで攻撃するの忘れてら。  
・・・・・・黙ってこw

十代 手札 1

場 フレイムウイングマン

スパークマン

伏せ 1

でもなあ、1ターンでこれほどの展開ってね。こいつ本当にオシリスレッドか？

ライイエローくらいでも行きそうだが……。

「俺のターン、ドロー」

引いたカードを手札に加え、状況確認。

ふむ……俺のデッキであいつの《フレイムウイングマン》に勝てるカードは、

いまのところ《インフェルニティ・デストロイヤー》のみ。

デプス・アミュレットの効果を使えるのはあと3回……いや、手札減るしな……。

んー……。どうしよ？

……守るか。

「……しゃあないか、俺は《インフェルニティ・ガーディアン》を  
守備表示で召喚！」

ドクロから炎が出てる感じの変なモンスターが出てくる。  
絵柄では赤色の炎なんだが、守備だから今は青い色の炎を出している。

「おお！！またかつちよいいインフェルノモンスターか！？」

「インフェル《ニティ》だ！！」

「まったく……ってかつこいい？……ええー。」

「カードを2枚セット……このままターンエンド」

「デーモンでアタックしてもよかったんだが、あの伏せ、何かあると思う。」

「ここは慎重に、コンボが揃うまでだ。」

京介 手札 2

場 インフェルニティ・デーモン

インフェルニティ・ガーディアン

伏せ 2

デプス・アミュレット

「もっと攻めてこようぜ！！、俺のターン！！」

・・・できねえんだよ。

「もつと攻めるぜ！！俺は手札から、《O・オーバーソウル》を発動！！

墓地に存在する、《E・HEROフェザーマン》を、特殊召喚！！」

緑色の鳥みたいなモンスターが現れる。

いや、人の形してるけど。

「さらに装備魔法、《スパークガン》を、スパークマンに装備！！」

ソーコムのような銃が、スパークマンの手に収まる。

「《スパークガン》の効果を発動！！自分のターンに、3回まで表側モンスターの表示形式を変更できる！！

俺は《インフェルニティ・デーモン》の表示形式を守備に変更！！」

「くそ・・・」

スパークマンによってデーモンは雷の走る弾丸を受け、腕をクロスさせて守備の体勢をとった。

デーモンの守備力は1200・・・まずいな。



「もういっちょ！！続けて《インフェルニティ・ガーディアン》を攻撃表示に変更！！」

ガーディアンの炎が絵柄と同じく紅く燃え始める。

おいおい・・・ガーディアンの攻撃力は1200だし・・・

こりやまずいぞお？

「そしてリバースカードオープン！！《魂の結束・ソウル・ユニオン》！！」

さらにここでトラップかよっ・・・ッ！！容赦ないな！

「このターン、攻撃表示のモンスターの1体の攻撃力は自分の墓地から選択した「E・HERO」と名のつくモンスター1体の攻撃力分アップする！！」

「なに！？」

もしあの時デーモンで攻撃していたら・・・俺は大ダメージを負っていたな。

「俺は墓地の、《E・HEROエッジマン》を選択!!、フェザーマンの攻撃力を、2600ポイントアップする!!」

フェザーマン

ATK1100    ATK3700

「3700・・・っ!!」

「よし、バトルだ!!。  
まずはスパークマンで、《インフェルニティ・デーモン》を攻撃!!」

「く・・・デプス・アミュレットの効果を発動っ・・・!!  
手札を一枚捨てて無効にする・・・」

「それは予想済みだぜ!! 続けてフレイムウイングマンで攻撃だ!!」

「デプス・アミュレットの効果を発動・・・っ。  
攻撃を無効・・・!!」

これで俺の手札は0・・・デプス・アミュレットの効果はもう使えない。

「へへん・・・もうその罫は使えないよな!!」

それじゃ、《E・HEROフェザーマン》で、《インフェルニティ・ガーディアン》を攻撃だ!!」

ダメージを重視して狙ってきたか、だがそれがミスだ十代!!

「フェザーブレイク!!」

翼からいくつもの羽をガーディアンに飛ばす。

だがその羽はガーディアンに刺さるも、ガーディアンは倒れなかった。

「なに・・・?・・・どうして破壊されないんだ?」

当然さ、今の俺の手札は「0」なんだからな。

「十代、忘れていないか?俺のデッキは、手札が0の時に真の力を発揮するんだぜ?」

「あつ！……そ、それじゃあー！」

「ああ、《インフェルニティ・ガーディアン》の効果、それは手札が0枚の時、このカードは戦闘では破壊されず、カードの効果でも破壊されないのさー！」

な、なんだってーっ！！？？

「え？」

外部から声が聞こえた。

つていつのまにか人が多くなってる。中には昨日俺の部屋にきた金髪の女もいた。

「く……さっすがは京介……そんな強力なカードを持っているなんてな。

だがダメージは受けてもらっぜー！！いつけえ！フェザーマンー！！」

「くっ……！！」

京介 LP4000 1500

フェザーマンの羽が俺にも刺さる。

痛くはないが怖い。よって怖い。マジ怖い。

「俺はターンエンド!!この瞬間、フェザーマンの攻撃力は元の数値に戻る」

十代 手札 0

場 フレイムウイングマン

スパークマン 《スパークガン》装備

フェザーマン ATK 3700 1100

「おもしろなあ、十代・・・俺のターンだ」

おもしろい、おもしろいさ!!

さあて俺もそろそろ攻めるぜえ!!

「ドロー!!.....へへっ」

こんな土壇場でこのカードを引くなんてな、俺は運がいいかもな！！

「その表情だと、すっげえカード引いたんだろうな！！」

「ああ、この場を逆転させることのできるカードだぜ」

「うおおおお！！おつもしれ〜！！速くみせてくれよ！！  
お前のコンボをさあ！！」

コンボじゃねえけど、逆転はできるぜ。  
さあいくぞ！！

「俺はカードを一枚伏せ、そしてリバースカードオープン！！」

《ZERO・MAX》！！！！

一度伏せたのは無駄じゃない。

このカードは発動時にこのカード自身が一枚と認識されるため一度  
伏せる意味があるのだ。

「《ZERO・MAX》！？おお、なんだ！！そのカードの効果は

!？」

焦んなよ、今言うからな。

「このカードは、自分の手札が0枚の場合、自分の墓地に存在する「インフェルニティ」と名のついた選択したモンスターを特殊召喚し、

特殊召喚したモンスターの攻撃力より低い攻撃力を持つ、フィールド上に表側表示で存在するモンスターを全て破壊することができる!！」

「な、なに!!!!??. . .でも京介の墓地にモンスターなんかいなかった. . .ああ!!！」

「そう、《デプス・アミュレット》の効果で墓地に送っていたカード. . .それはな. . .こいつだ!!！」

デュエルディスクの墓地からモンスターカードを一枚取り出し、十代に見せた。

「イ、《インフェルニティ・デストロイヤー》. . .っ!!そのカードはあの時の!!！」

「ふふん・・・」

本来ならば普通に召喚したかったんだが・・・十代の予想外の強さで捨てることとなってしまった。  
だが今回はそれが逆によかった。

「《ZERO・MAX》の効果によって、墓地から現れる！！《インフェルニティ・デストロイヤー》！！！」

「うおおお・・・すっげえ！！！」

禍々しい姿でデストロイヤーが現れた。  
なかなかいい展開で出るやつだな。

「さらに《ZERO・MAX》の効果によって、特殊召喚したモンスターは攻撃力以下のモンスターを破壊する！！  
《インフェルニティ・デストロイヤー》の攻撃力は2300・・・  
よってお前の場のモンスターを全て破壊する！！」

フレイムウイングマン、スパークマン、フェザーマンは塵となって消えた。

・・・ちなみに俺の場のデーモンも。



「ああ！！みんな！！・・・ってなんで京介のモンスターまで破壊されたんだ？」

「・・・《ZERO・MAX》の効果はフィールド全体に効果を及ぼすんだよ。よって俺の《インフェルニティ・デーモン》は破壊されるが、  
《インフェルニティ・ガーディアン》は自身の効果によって破壊されない」

「そ、そつか！！・・・おつもしれ！！」

デーモン・・・可哀想な子。

「・・・俺もおもしろいぜ！」

やっぱり強い奴と戦うのはおもしろい。

デュエルアカデミア・・・行ってよかったかもな！！

「《ZERO・MAX》を発動したターン、バトルフェイズを行うことはできない・・・。

《インフェルニティ・ガーディアン》を守備表示に変更し、ターンエンドだ！！」

京介 手札 0

場 インフェルニティ・デストロイヤー

インフェルニテ・ガーディアン

伏せ 2

デプス・アミュレット

「危なかった・・・もしあのまんま攻撃を喰らってたら大ダメージをもらうところだったぜ・・・」

「まあな。でも今お前の場には何もない、そして手札も0。この場からお前はとう切り抜けるんだ？」

普通に見れば圧倒的に俺が有利だが・・・こいつのことだ、何かしてくるに違いない。

「わかんねえな！！・・・でも京介と同じく、俺もこのドローにかけるぜ！！」

さっきとまったく逆な状況だな・・・。

「・・・京介、お前すげーよ」

「・・・は？」

いきなり十代が語り出した。あ、心理フェイズですね。

「俺、今まで出会ってきた中で京介みたいなつええやつと出会ったのこれが初めてだし！！  
これから一緒に学園にいたいと思うとワクワクがとまらねえぜ！！！！  
！」

・・・ふうん？

「だから俺も、全身全霊をかけて京介の相手をするぜ！！」

そう言って十代はデッキに手を添える。サレンダーではなく、ドロの姿勢だ。

「・・・・・・・・・・・・・・・・ドローーーーーッ！！！！！！！！！！」

見せてみるよ十代、お前の本気をさ!!

どんな戦術かは知らないが・・・俺のこの伏せ二枚がそれをうち砕いて見せる!

## 第二話 デュエルツ！〈E・HERO〉使い（後書き）

5DSの遊星は「スターダスト・ドラゴン」を拾ったって言ったね。

ならちよいとオリ設定でこんな感じにしました。

### 第三話 運命のドロップ！（前書き）

さて、まずあやまらせていただきます。

今回、都合合わせの展開によって一枚のカードの効果を少し変更してしまいました。

それと、都合合わせのオリカも出させて頂きました。

オリカ嫌いの方もいらっしゃるでしょうから、不愉快に感じましたらすみません。

12月 23日 デュエルの矛盾を修正しました。



「よしっ……!! いくぜ京介!!。  
手札から、《融合回収》フュージョンリカバリーを発動!! 墓地の《融合》と、《E・HEROスパークマン》を手札に加える!!」

また融合かつ

「そして手札の《E・HEROクレイマン》と《E・HEROスパークマン》を融合!!  
現れる!! 《E・HEROサンダージャイアント》!!!」

E・HEROサンダージャイアント

ATK 2400

バチバチ稲妻を立てながら、電気を身に纏った巨人が現れた。

「攻撃力2400……俺の《インフェルニティ・デストロイヤー》の2300を越えてきたか……」

俺の場にはまだ《デプス・アミュレット》がある。

これで今のところ6回の攻撃を防ぐことができるな。

だが十代は俺の発言を聞いて笑っていた。



・・・なんだ？

「へへっ、誰も攻撃してモンスターを破壊するなんて言っただけ？」

「む・・・？」

「いくぜ！！《E・HEROサンダージャイアント》の効果を発動！！」

このカードが召喚された時、このカードの攻撃力以下のモンスターを一体、破壊する！！」

「なに・・・っ!？」

「さっきのお返しだぜ、俺は京介の場の《インフェルニティ・デストロイヤー》を選択！！  
くらえ！！、ヴェイパー・スパークッ！！」

「ちい・・・！！」

デストロイヤーは空からの雷に打たれ、爆発した。  
・・・さて、少しやばいな。

「まだ終わらないぜ？、俺は《サイクロン》を発動！！  
《デプス・アミュレット》も破壊するぜ！！」

おまつ

「容赦ねえなあ！！、十代！！」

「おっもしれゝからな！！！！」

答えになつてねえよ！！！！

「でも、これでもう攻撃は無効かできないだろ？  
最後だ！！、手札から、《H・ヒートハート》を発動！！  
サンダージャイアントに装備！！」

サンダージャイアント

ATK2400 2900

「2900・・・だが《インフェルニティ・ガーディアン》は守  
備表示だ。

俺のライフを削ることはできんぞ！！」

「違うなっ、《H・ヒートハート》のもう一つの効果！、それは守備表示モンスターを攻撃したとき、その越えた数値分、相手に貫通ダメージを与える！！」

げげっ！！

ガーディアンを守備力は1700だ、2900からの貫通喰らったらダメージは1200・・・俺のライフは残り1500、余るのは300・・・ッ！！

「さらに京介、お前の《インフェルニティ・ガーディアン》は手札が0枚の時しか

その効果は発動しないんだよな？

ならこのまま破壊させてもらっぜ！！バトルだ！！」

くっそっ！！！！今発動させるべきか否か

「サンダージャイアントで《インフェルニティ・ガーディアン》を攻撃！！」

ボルティック・サンダー！！！！」

・・・いや、ここでやるべき！！！！

「くっ 罨発動!! 《全弾発射》!!

手札を全て墓地へ送り、

墓地に送ったカードの枚数×200ポイントダメージを相手ライフに与える!!」

「何!! うわああッ!!」

十代 LP4000 2800

「《全弾発射》の効果で俺の手札は再び0・・・よって《インフェルニティ・ガーディアン》は戦闘では破壊されない!!」

「くっ・・・だがダメージは受けてもらっぜ!!」

「むうつ・・・!!」

ガーディアンを貫通して俺にも雷が走る。

京介 LP1500 300

「やっぱそう簡単にはやられねえよなあ!!、俺はターンエンドだ

「!!」

十代 手札 2枚

場 《E・HEROサンダージャイアント》

「まった逆転されちまったなあ・・・まいったねこりゃ」

「こんないろんな出来事があるから、デュエルは面白いのさっ!!」

そんな満面の笑みをするな・・・なんか萎えるぜ。

「俺のターン・・・ドローッ」

引いたカードは・・・っ!!なんちゅう運カードだよ!!

「俺は手札より、《インフェルニティ・リローダー》を守備表示で特殊召喚!!」

銃口を前後に合わせたようなモンスターが俺の場に現れた。

「今度はどんな効果なんだッ!?」

「《インフェルニティ・リローダー》の効果、それは自分の手札が0枚の場合にこのカードをドローした場合、

このカードを自分フィールド上に特殊召喚することができる。

さらに1ターンに1度、自分のデッキからカードを1枚ドローする事ができ、この効果でドローしたカードをお互いに確認。

モンスターカードだった場合、そのモンスターのレベル×200ポイントダメージを相手ライフに与える!!!」

「かけのカードか!!、おっもしれえ!!」

いい効果だけじゃあないんだがな。

「ただし・・・それが魔法、罠だった場合、俺は500ポイントのダメージを受ける・・・」

「な、それじゃあ、もし魔法か罠を引いたら・・・ッ」

ああ、そうさ。

「俺は500のダメージを受ける・・・よって俺の負けだな」

俺はデッキの上に指を添える。

「これがモンスターか魔法か罠か・・・確率は3分の1？  
・・・違うな、当たるかはずれるかの二分の一だッ！！！」

俺は信じるさ・・・社長が俺のために作り、そして俺が初めて心を込めたデッキだ。

「さあ行くぜ？・・・・・・ドローッ！！！！！」

ちよいと格好つけてドローしてみた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

正直見るのが怖い・・・だが負けんさ・・・。

「・・・ゴクッ」

十代も気になるのか息を飲んでいる

「・・・・・・・・・・」

引いたカードをゆっくり裏返し、横目でそのカードを見た。

「・・・・・・・・ど、どうだったんだ？」

・・・・・・・・・・。

「・・・・・・・・ふ」

さっすが・・・・・・・・だな。

俺は引いたカードを人差し指と中指で挟んだまま、そのカードを十代に見せた。

「俺の引いたカード・・・それは《インフェルニティ・デストロイヤー》!!!!!!」

「うおおおおおッ!!!!!!すっげえ!!!!!!」



神引きとはこのことだ！！！  
てか十代も喜ぶなよ！！！！俺は敵だッ！！！！

「デストロイヤーのレベルは6ッ・・・よって1200ポイントのダメージだ！！」

「くっ・・・ッ」

十代の方角のリローダーの銃口がカチリッと言なり、そこから弾が発射されて十代を貫いた。

十代   LP2800   1600

「そして俺の場の《インフェルニティ・ガーディアン》を生け贄に・  
・  
引いた《インフェルニティ・デストロイヤー》を召喚ッ！！！！」

再びデストロイヤー。過労死すんなよ？

「やるなあ・・・でもそのモンスターじゃあ、俺のサンダージャイアントを倒すことは出来ないぜ！！」

「甘いッ！…さっきのお返しのお返しだッ！…リバーズカードオ  
ーブンッ！…」

ずっと伏せていたカード・・・このときのために取っていたのさッ  
！！

「《インフェルニティ・プレッシャー》！！

自分の手札が0の時、このカードが場に存在するかぎり自分の場の  
《インフェルニティ》と名の付いたモンスターは  
戦闘では破壊されないッ！！。

さらに、自分の場の《インフェルニティ》と名の付いたモンスター  
の数だけ相手フィールド上のモンスターの攻撃力は100ポイント  
ダウンするッ！！！！

ただし、このカードが存在するかぎり、自分は相手に戦闘ダメージ  
を与えることはできないッ！！」

サンダージャイアント

ATK2400 2200

「サンダージャイアントの攻撃力が2200・・・京介のモンス  
ターに負けた！？」

「いくぜ、バトルだッ！！《インフェルニティ・デストロイヤー》の攻撃！！」

デストロイスラッシュッ！！」

十代のサンダージャイアントは雷を出し抵抗していたものの、最後にはデストロイヤーによって切り裂かれた。

十代   LP 1600   1500

「く……だが、このターン、俺は持ちこたえたぜッ！！！！  
京介の場はそのモンスターだけ、次の俺のターンで決めてみせるぜ  
！！」

「残念、これで終わりだ」

「何？……だ、だってそのカードの効果で俺は戦闘ダメージは喰  
らわないはずじゃあ……」

「戦闘ダメージは確かに与えられない……だが効果ダメージは与  
えられる！！！！」

「効果ダメージ？・・・ああッ！！！！そうか！！」

「思い出したか、《インフェルニティ・デストロイヤー》の効果。それは相手モンスターを破壊した場合、相手に1600ポイントのダメージを与える！！」

「ま、まじかよ・・・」

自分でもびっくりだ、ここまで上手くいくなんな。

「俺の勝ちだぜ十代、行け！《インフェルニティ・デストロイヤー》  
《！！！！》」

「うわああああああッ！！！！」

デストロイヤーが十代の前にジャンプし、そのまま十代を切り裂いた。

十代      LP 1500      0



### 第三話 運命のドロップ！（後書き）

インフェルニティ無双。

ただ作者は植物ライロを使用しています。

#### 第四話 デュエルの新たな可能性、シンクロ召喚！（前書き）

さてさて、題名のとおり、なんとシンクロの登場です。

作者は日常描写が苦手なので、無理矢理デュエルにさせてます

追記・鈴虫様の指摘により、デュエルに間違いがありましたので修正しました。

#### 第四話 デュエルの新たな可能性、シンクロ召喚！

「・・・すっげえ！！すっげえよ京介ッ！！！！このデュエル、めちゃくちゃ燃えたぜッ！！」

「ああ、俺も楽しかった」

デュエルが俺の勝利で終わり、今は十代と話をしていた。

しかしぎりぎりだった・・・俺のプレイミスもそうだが、もしあの引きがなかったら俺が負けていただろうな。

「兄貴の言つとおり、すごいデュエルだったすよ二人とも！！」

「そりゃどーも」

俺の隣にいるこの青髪の子ビ眼鏡は丸藤翔。

さっき自己紹介されたが、どうやら十代を兄貴と慕っているようだ。そんな翔も制服の色は赤、つまりオシリスレッドだ。

「そっついや大丈夫なのか？」



「ん？何がだ？」

「俺達勝手にここに使ってるけどさ、許可とかいらねえの？」

「……………」

「……………ん？」

え、何この沈黙。

おい十代、なぜ冷汗を垂らしている。

「おい黙るなよ……………え、まさか？」

「はは……………またやっちゃった……………」

「無断でこの場所を使うと停学……………悪くて退学ってところかしらね」

「は？」

突然後ろから声がし、振り返るとそこにはあの女がいた。

「あんたはあの時の……」

「げっ、明日香!!」

明日香と呼ばれた女は俺と十代を交互に見た後、深いため息をついた。

「十代……あんた前のことがまったく懲りてないのね？」

「い、いやー京介のデュエルを思い出したら無償にしくなってます」

この前？十代は前にもここを無断使用したのか？

「いい加減にしないで……前回は許したけれど、今回はもう駄目よ」

「そ、そんなあ~~~~ッ」

「ちょっといいか？話がまったく読めんのだが？」

「あなたもあなたよ」

「え？」

やべ、俺に矛先向いたなこりゃ。

「無断でデュエル場を使用してはならないって、入学時にもらったしおりに書いてあったはずよ。」

十代に誘われたとはいえ、あなたも『知らなかった』じゃすまされないわ」

「えーっ」

まずいかなー。いくら俺が社長の推薦だからって校則に引っかかったら言い訳聞かないしな。

しかも社長はそんな所を気にする人。テストデュエリストとしてはまずい事態だ。

「ちょっと待てよ明日香っ！、京介は俺が無理矢理連れてこらしたんだ、悪いのは全部俺だ！  
京介に罪はない！」

「十代……」

確かにそうなのだが、それに乗ったのは俺だ。

この意見は聞いてもらえないだろうと予想したのだが、

「……そうねえ、私の言うことを一つ、聞いてくれたら、この事は黙ってあげましょう  
もちろん、ここにいるみんなにもね」

そう言って周りを見渡す。

頷いてるあたり、ここにいる奴らはこの『明日香』を慕っているらしい。

「おう、聞く聞くっ!!どんな願いだって聞いてやるぜ!!」

「私の願い、それはデュエルよ」

左手を上げ、デュエルディスクを見せてくる。  
てかデュエルかよ?

「おっしゃあっ!、受け手立つぜ!!!!」

「ああ、悪いけど、戦うのは十代じゃないわ」

「ええっ？俺じゃねえの？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

まさか・・・・・・・・な？

「私が戦いたいのは、もちろんあなたよ！！」

ビシッと俺に指を指してきた。人に指を指したらいけません。

「きよ、京介と？」

「俺と？」

「ええ、『インフィニティ』だったかしら？  
あんな特殊なデッキを使うあなたに興味があるの」

「インフ『エルニティ』だっ」

「あらごめんなさい、悪かったわね」

こいつ・・・挑発してやがるな？

昨日俺があしらったことに怒ってんのか？

「それでどうするの？もし私に勝てたら、今回の事も黙っておいてあげるわ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

迷う必要はないと。

~~~~~

「そういえば自己紹介がまだだったわね、私は『天上院明日香』、あなたと同じオベリスクブルーよ」

「かい・・・神原京介だ」

「そう、神原君ね、まず、私の挑戦を受けてくれたことに感謝するわ」

挑発しておいて何言っただか。  
まあ乗ったのも俺だがね。

「亮もあなたに興味を持っていたわ・・・いい勝負ができそうね」

亮？

「さあ行くわよ、デュエルッ！！！」

「約束は守れよっ、デュエル」

京介      LP4000

明日香    LP4000

「京介ーッ、がんばれよーっ！！！」

「神原さん頑張ってくださいーいつ」

応援ありがとう。

「先行はもうわ、私のターン、ドロースー！！」

女のデュエリスト・・・侮れないな。  
ここは慎重にっつと。

「私は手札から《サイバー・チュチュ》を攻撃表示で召喚っ！！」

ATK1000

ペガサスはどんな理由でこんなモンスターを考えたんだろうって感じのモンスターが現れた。  
いい趣味だ。



「カードを2枚セットして、ターンエンドよ!」

明日香 手札 3枚

場 サイバー・チュチュ

伏せ 2

「俺のターン、ドロー」

まだどんなデッキかは解らないか・・・。  
少なくともあいつは今までの俺のデュエルを見ているはず。  
俺が不利だな。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

さて、どうする? まずは様子見で守るか? それとも攻めるか?  
攻めるならデーモン、守るならガーディアンってところか。

「……………俺は《インフェルニティ・デーモン》を攻撃表示で召喚っ」

攻めに決めた。

「バトルだっ！、《インフェルニティ・デーモン》で、サイバー・チュチュ……………  
《サイバー・チュチュ》を攻撃！！」

「噛んだな」

「噛んだっすね」

うるせえおまいら！

「畏カード発動！、《ドゥーブルパッセ》！！、相手モンスターの攻撃を直接攻撃に変更させ、さらに攻撃対象となったモンスターの攻撃力分のダメージを相手に与えるわっ！！」

デーモンは天上院のモンスターを通過し、ダイレクトに攻撃を喰らわそうとする

「さらに暴発動!!、《ホーリーライフバリアー》!!  
このターン、私に来るダメージを全て0にする!!」

ピタッとデーモンは寸前で攻撃をやめ、もとの場所に戻った。

「《ドゥーブルパッセ》の効果により、行きなさい!!、《サイバ  
ー・チュチュ》!!」

「おうッ」

体当たり・・・なのか?そんな感じの衝撃を受けた気がした。  
・・・ソリットビジョンでもこええ・・・。

京介   LP 4000   3000

「ち・・・カードを4枚セットし、ターンエンドだ」

京介   手札   1枚

場   インフェルニティ・デーモン

伏せ 4

「どうやらモンスターが手札に来ていたようね、手札を0枚に仕切れてない」

「運悪かったんだよ」

「どうかしらね・・・私のターン!!」

運が悪いというのは嘘、実際はすごくよかったりする

「手札から、《ブレード・スケーター》を召喚!!」

んー。

「さらに、速攻魔法、《アレグロ・トゥール》!!  
自分がモンスターを召喚したとき、相手の魔法、罠カードを一枚破壊することができるわ!!」

んんッ!?

「私は……………右から二番目のカードを選択する!!」

ブレード・スケーターが回転しながら俺の伏せを破壊した。

「《聖なるバリア ミラーフォース》…………危なかったわね」

俺の伏せは残り三枚。まだまだ余裕だ。

「カードを一枚セットして、ターンエンドよ!!」

明日香 手札 1

場 サイバー・チュチュ

ブレード・スケーター

伏せ 1

さっきから攻撃力の低いモンスターしか出さないな……

「ドロー前に、俺は罫を発動！！《サンダー・ブレイク》！！手札を一枚捨て、相手フィールド上のカードを一枚破壊する！！」

破壊するのは・・・伏せだ！！

「俺はその伏せカードを破壊！！」

「っ・・・やるわね」

手札を一枚墓地に送って、天上院の伏せを破壊した。  
因みにカードは《激流葬》だった。

・・・激流葬？

「・・・・・・・・・・そして俺のターン、ドロー」

モンスターはあいつのほうが出ているはず・・・なのになぜ《激流葬》を？

なにかあるのか？

「俺が引いたカードは《インフェルニティ・リローダー》！自身の効果により、守備表示で特殊召喚する！」

「引いたカードの種類によって効果を変えるモンスターね」

もう検証済みってやつか？

「《インフェルニティ・リローダー》の効果を発動！、デッキからカードをドロ―！！」

引いたカードは・・・ゲツ、魔法！！

「・・・俺が引いたのは魔法カード、よって俺は500ポイントのダメージを受ける・・・」

銃口がこちらを向き、弾が俺を撃ち向いた。

「くそぉ・・・」

京介LP3000 2500

だが引いたこのカードはいい。

「俺は引いた《インフェルニティ・インフィニティ》を発動！  
デッキからレベル2以下の《インフェルニティ》と名の付いたモン  
スターを、手札に加える！」

「あら、さっきまでの引きの良さはどこにいったのかしら？」

「む」

俺はデッキからカードを手札に加えた。

「うるせえっ、ええい、バトルだ！！、《インフェルニティ・デー  
モン》で、《サイバー・チュチュ》  
に攻撃！！、ヘル・プレッシャー！！！」

空間より出た炎の腕によって、《サイバー・チュチュ》は押しつぶ  
された。

「・・・っ・・・ふふ、面白いわっ」

明日香 LP4000 3200

「モンスターをセット、ターンエンド！、さっさとこい！！！」



京介 手札0

場 インフェルニティ・デーモン

インフェルニティ・リローダー

モンスター裏側守備

伏せ 2

「言われなくてもいくわッ！、私のターン、ドロー！！」

俺の場には攻撃力1800のモンスター・・・  
そして2枚の伏せは《炸裂装甲》と《奈落の落とし穴》、攻撃にも  
対応、召喚にも対応、準備は万全だ。

「・・・ふふ、神原君、見せてあげるわ、美しい私のモンスター  
達を！！」

私は手札から《融合》を発動！！、場の《ブレード・スケーター》  
と手札の《エトワール・サイバー》を融合！！」

お前も融合か！！

「現れなさい！、《サイバー・ブレイダー》！！」

サイバー・ブレイダー    ATK 2100

長い髪で・・・これまた・・・ふつくしい・・・  
つと、見とれている場合じゃねえか！

「甘いぜ、畏発動！！《奈落の落とし穴》！

攻撃力1500以上のモンスターが特殊召喚されたとき、そのモンスターをゲームから除外する！！」

地面が裂け、そこに《サイバー・ブレイダー》が落ちて・・・いかない！？

なんと《サイバー・ブレイダー》はその場でジャンプし、奈落から避けた。

「え、な、なぜだ？」

「ふふ、甘いのは貴方ね。

《サイバー・ブレイダー》の効果、それは相手のモンスターの数によって効果を得るのよ！」

「むっ!?!」

「相手モンスターが3体の時、相手の魔法・畏・モンスター効果を全て無効にする効果を得る!」  
P a s D e Q u a t r e !」

「なっ・・・!」

効果を全て無効・・・だと?  
なら《炸裂装甲》も意味がないっ!!

「さあ行くわよ!!、《サイバーブレイダー》で、《インフェルニティ・デーモン》を攻撃!!」  
グリッサード・スラッシュ!!」

「ちいっ・・・!」

スケートの足についている刃で、デーモンはあっけなく破壊されてしまった。

京介    L P 2 5 0 0    2 2 0 0

「《サイバー・ブレイダー》の2つ目の効果を発動！  
相手モンスターが2体になったため、このカードの攻撃力を倍にする！

P a s D e T r o i s !」

サイバー・ブレイダー

A T K 2 1 0 0    4 2 0 0

「攻撃力4200・・・一撃でもくらったら即死だな」

場から天上院に目を向けると、あいつはニヤリと笑った。

「・・・どうしたのかしら？あなたの力はこんなものじゃないはずよ？

私に見せてちょうだい、あなたの本気をつ。

ターンエンド！」

明日香 手札 0

場 サイバー・ブレイダー

伏せ 1

「・・・・・・・・・・」

俺の場にはリローダーと裏のモンスターのみ……。そして相手の場には攻撃力4200のモンスター。

もし俺がモンスターをまた出せば今度は魔法、罠、効果を受けなくなってしまう。

だが今の俺の場には奴の攻撃力を越えるモンスターはいない……。どうする？

・・・・・・・・デストロイヤーを引くしかない・・・か

「俺の・・・・・・・・ターンッ!!!!!!!!!!!!!!」

来い!!!!

「・・・・・・・・よし!」

引いたカードは《インフェルニティ・デストロイヤー》！  
お前最高!!

だが《サイバーブレイダー》はモンスターが一体の時は戦闘では破壊されない、

よってデストロイヤーの効果は発動できない・・・ならば！

「俺は伏せモンスターを表にする！、  
現れる！《インフェルニティ・ビードル》！

インフェルニティ・ビードル

ATK 1200

「っ！・・・また新たなインフェルニティ？」

「場の《インフェルニティ・リローダー》を生け贄に、現れる、《  
インフェルニティ・デストロイヤー》！！

インフェルニティ・デストロイヤー

ATK 2300

「出たわね・・・でもそのモンスターでもってしても、私の《サイ  
バーブレイダー》には敵わないわよ！！」

敵わなくていいのさ・・・本番はここからだ！！！！

「《インフェルニティ・ビードル》の効果を発動!!  
手札が0枚の時このカードをリリースすることによって、デッキから同名のカードを2枚、場に特殊召喚する!!」

「!!なんてすって!?!」

「俺はビードルをリリース!、新たなビードルを2体、場に特殊召喚!!」

カブトムシが場に2体・・・いや、2匹現れた。

「これで俺の場のモンスターは三体、《サイバー・ブレイダー》の攻撃力は元に戻る!」

「ふうん?・・・・・・・・」

サイバー・ブレイダー

ATK4200 2100

(なんだ?・・・あの予想していたかのような表情は?)

「残念ね、それは譲れないわ！、罨カード発動！《サイバー・スケ  
ーター》！！！」

「ここで罨！？」

「そうよ、《サイバー・スケーター》の効果・・・それは自分の場  
の「サイバー」と名の付いたモンスターの数だけ、  
その選択したモンスターの攻撃力以下の相手モンスターを破壊する  
ことができる！！！」

「なにッ！？」

「私が選択するのはもちろん《サイバー・ブレイダー》よ。  
よって攻撃力2100以下・・・《インフェルニティ・ビードル》  
を一体破壊するわ！！！」

「く・・・！！」

一体のビードルが爆発した。  
これで俺の場はまた2体になってしまった。



「さらに、この効果でモンスターが破壊された時、相手フィールド上の魔法、罠を一枚破壊する」

追い打ちをかけんなよ・・・！  
唯一の希望であつた《炸裂装甲》も破壊されてしまった。

「そして相手モンスターの数が2体になったため、《サイバー・ブレイダー》の2つ目の効果が発動！  
Pas De Trois！」

サイバー・ブレイダー

ATK 2100    4200

「・・・・・・・・・・く・・・・・・・・」

「どうかしら？私のモンスター達は？」

「・・・・・・・・・・」

「・・・正直・・・ここまでやるとは思ってなかったけど、なかなかの強さね。

でも亮が言うほどの強さでもなかったわ」

ここで俺は負けるのか？

「でもいいデュエルだったわ・・・約束はデュエルをすることだけだったから、今回の事は黙っていてあげる」

いやだね。

考えてみるよ・・・俺にはあつたじゃねえか。  
俺の場にはデストロイヤーとビードルだけ・・・。  
2体だから攻撃力は倍になる・・・。  
ならばまた一体にすればいいだけのこと。

(デストロイヤーのレベルは6・・・そしてビードルは2!!!!!!)  
(

「まだだ・・・」

「え？」

「まだまだ・・・こんなじゃあ満足できねえッ！」

「か、神原君？」

社長さんよ……使わせてもらっぜ!!!

「お前に見せてやるよ……デュエルの新たな可能性を……」

「何を言っているの……？」

あなたの手札は0、伏せカードもない、場には私の《サイバー・ブレイダー》を越える攻撃力をもつモンスターはいない……この状況でどう私に勝とうと言うの？」

できるんだな、これがな！

「いくぞ!!、俺はレベル6、《インフェルニティ・デストロイヤー》に、

レベル2、《インフェルニティ・ビードル》をチューニング!!!」

「チューニングッ……ですって!？」

「チューナー」なのだからチューニング……いいよな？  
だから社長さん、あんたから譲り受けたこのカード、出させてもらっぜ!!!

ビードルは2つの緑の輪となり、デストロイヤーを囲む

「大いなる風に、導かれた翼を見よ！」

やがて囲んでいた輪が光に包まれる

「シンクロ召喚！！！」

これが『シンクロ』・・・満足できるな！！

「響け、《スターダスト・ドラゴン》！！！！！！！！！」

星のような粒子をばらまきながら、美しい白き竜が俺のフィールドに現れた。



#### 第四話 デュエルの新たな可能性、シンクロ召喚！（後書き）

オリカを出すのはいいいけどぶっこわれたらまずいし……ううむ、難しい。

今回は京介が使ったオリカを紹介します。

《インフェルニティ・プレッシャー》

永続罫

「自分の手札が0枚の時、このカードが自分フィールド上に存在する場合、フィールド上に存在する《インフェルニティ》と名の付いたモンスターは戦闘では破壊されない。

また、相手フィールド上のモンスターの攻撃力は自分フィールドに存在する《インフェルニティ》と名の付いたモンスターの数×100ポイントダウンする。

このカードがフィールド上に存在する限り、自分は相手に戦闘ダメージを与えることはできない」

《インフェルニティ・インフィニティ》

通常魔法

このカードは、自分の手札がこのカード一枚の時しか発動することができない。

デッキからレベル2以下の《インフェルニティ》と名の付いたモンスターを手札に加える事ができる。



## 第五話 出会い（前書き）

やはり作者は日常・・・というより会話が苦手です。

さてさてどうしたとやら

## 第五話 出会い

「スターダスト・・・ドラゴン・・・」

白く、輝く光の粒子を回転しながら飛んでまき散らすのその姿。

「・・・・・・・・すげえ・・・」

「すごいっす・・・」

「・・・・・・・・きれい」

十代も翔も、敵の天上院さえその美しさに目を奪われているようだった。

スターダストドラゴンは翼で自身を包んだ状態で何度も回転し、そして俺の目の前に来てその翼を開いた。

【-----ッ!!!!!!!!!!!!!!】

星屑の雄叫びがこのデュエル会場に響く。

今の俺達にとってはその雄叫びさえ美しく聞こえた。

《スターダスト・ドラゴン》

ATK2500

「…………ハッ!!」

おおつと、見とれている場合じゃないな。

俺は軽く頬を叩き、デュエルに集中し直す。

見ると天上院も正気を戻したようで、視線をこちらに戻した。

「すごいわね、こんな綺麗なモンスターがいたなんて。今まで見たこともなかったわ。」

「ああ、俺もさ、初めて使って…………ん？」

チラッと目でスターダストドラゴンを見た。

するとスターダスト・ドラゴンは何と俺を見ていた。

【……………】

スターダストドラゴンは何も言うことなく、ただ俺を見ている。  
俺の気のせいかもしれないが、俺を試そうとしている・・・そんな  
目を奴はしていた。

「・・・・・・・・？」

訳が分からないまま、俺はとりあえずデュエルを再開することにした。

「いくぜ天上院・・・・・・・・」

「ふっ・・・来なさい！」

「バトルだ！！、スターダストドラゴンの攻め・・・・・・・・ッ!？」

「・・・・・・・・え？」

攻撃を宣言しようとしたその瞬間、俺はいままでになく目眩に襲われた。

「う……あ……く」

何だ？この感覚は？

まるで頭を高速で振られたような、頭痛もしてきた。

「……………」

俺はだんだんと気分も悪くなっていき、ボタンと最終的に床にひれ伏してしまった。

「……ッ……！」

最後に見えたのは自分の方へと駆けつけてくる天上院の姿と

【……………】

静かに俺を見つめたまま、星屑となって消えていくスターダストドラゴンの姿だった。

~~~~~

遠い記憶・・・それは俺がまだ13歳の時だった。

その時俺は孤児だった。親の顔なんて覚えているわけがなく、ふらふらと町で食料を探す日々を送っていた。

やがて俺は施設に送られ、施設官に言われるがまま、ただ体を動かすことだけに没頭していた。

その施設は地獄だった。

毎日の過酷な労働、貧相な飯・・・それが毎日毎日・・・まさに地獄としか言いようがなかった。

俺はその時もう人生を諦めていた。もうやることもない、このまま俺は死ぬんだ、と。

この『無限』に続く『地獄』に・・・。

だがそんな生活は突如終わりを告げた。

いつものように重労働をしていたところ、一人の男性がこの施設に怒鳴り込んできた。

「・・・貴様達、ここで何をしている」

その男はドアを蹴り破って早々そんな事を言いだした。  
突然の出来事に俺達子供は呆然とし、施設官は当然のごとくその男に掴みかかった。

「ぐあッ！！！」

なんとその男は、持っていた銀のジェラルミンケースで思いっきり施設官の頭を殴った。  
あまりにも痛みに頭を抑えて床に転がる施設官を見て、他の施設官もその男に殴りかかろうとした。

だが、男が指を鳴らすと、突き破られたドアから黒い服を着て、サングラスをかけた男達、俗に言うSPが何人も入ってきた。  
いとも簡単に男はこの施設を包囲し、やがてこちらまで歩いてこんな事を言った。

「もう貴様達は自由だ！、誰にも縛られず、誰の言うことも聞かなくて言い！！！」

「ッ！！！」

理解した。

この男は俺達を救ってくれたのだと。  
それがわかった瞬間、俺は背を向けて歩き出している男に向かって

走っていた。

「おい！あんた！！」

「貴様！、何をしている！！」

数人のSPに抑えられながらも、俺はその男を呼んだ。  
男は顔をこちらに向けず、足を止めた。

「あんた、俺達を救ってくれたんだろ！？・・・ならあんたに礼がしたい！！」

「・・・礼なぞいらん、俺は当然の事をしたまでだ」

駄目だ、それでは俺が納得できない。

「待てよ！！それじゃあ・・・それじゃあ俺をあんたの息子にしてくれ！！」

歩めていた足を止め、その男は初めてこちらを向いた。  
すでにSPによって床で抑えられている俺を、その男は見下げる。



「・・・俺の息子に・・・だと？」

「そうだ！！、この恩は必ず返すッ・・・そのために、俺をあなたの息子・・・養子にしてくれ！！  
迷惑はかけない！！」

「・・・」

男は何もいわず、ただ俺を見ている。

く・・・だめか？

なにか・・・なにか無いのか？・・・そうだ！！

「なら・・・ならチェスで勝負しないか！？」

俺は向こうにあるチェス盤に目を向ける。

「・・・ほう？」

「それでも俺はチェスが得意でね・・・もしあなたに勝つたら、俺をあなたの養子にしてくれ。  
負けたら・・・あなたの元でもいい、タダ働きでもなんでもする」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

男はなににも言わない。

「おい貴様！、せっかく社長が助けてやったのだ！そのような無礼な行為が許させるわけないだろう！！」

「くっ 離せよッ！！」

じりじりと、男から俺は離される。

「待て」

「ッ！、社長！？」

だが男の一言でSPは動きを止める。  
その隙に俺はSPの腕を放す。

「・・・・・・・・似ている」

一瞬、男がそんなことを言った。

「え？」

「少年、名は何という？」

名前を聞かれたので、俺は唯一覚えている名前を言った。

「……………京介」

「京介か……………良いだろう、貴様の挑戦、受けて立つ！」

「……………ありがとうございますッ」

そうして俺はその男とチェスの勝負をすることとなった。  
俺達は机に座り、そこにチェス盤が置かれる。

そして俺の人生をかけた勝負が始まった。

「……………」

コトッ

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

コトッ

お互い、何も言葉を発さずに着々と駒を動かしていく。

「（強い・・・）」

俺は自分の認識を改めた。自分は結構チェスは得意だったのだが、まさかここまで強い人がいるとは。黙々と駒を動かし、時間が過ぎていく。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・く」

着々と俺の駒が男に取られていく。どうする？・・・・・・・・このままでは負ける。

チラッと男の方を見る。男もまた、俺を見ていた。

腕を組み、足をクロスさせた堂々した姿で、俺がどんな事をしようが男は俺の一步上を読んでいた。

「……………くそ」

どうする？どうする？

そこで俺は友人の言葉を思い出した。

『実はチェスにもイカサマがあるんだぜ、どうやるかは秘密だけだな』

『おいおい、勿体ぶらずに教えるよ。ま、といっても俺はそんなしなくても勝てるがな』

『たいした自身だねえ。まあいいや。教えてあげるよ。まずはここをね……………』

「ッ！！！！」

イカサマ・・・そうだ、ここをこつすれば・・・勝つことができる。

しかしもしばれたら？・・・。

いや、迷っている暇なんてない・・・ここはするべきー！

そうして俺は恩人とも言える人に最悪の仇で返した。

~~~~~

「ふうん・・・」

「・・・」

チェスの番白のナイトの移動先に、黒のキングがある。

「チェックメイト」

黒のキングを取り、白のナイトをその場に置く、  
これで勝負は白の勝ちだ。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

取った黒のキングを手のひらでコロコロさせているのは

「嘘だろ・・・・・・・・」

「ふうん・・・・・・・・まだまだのようだな」

男だった。

そう、俺は負けた。

「なかなかいい腕であったが、俺様にはまだ敵うまい」

⌈  
<  
•  
•  
•  
•  
•  
⌋

まさかイカサマをして負けるなんて思いもよらなかった……  
この人……強すぎる！

「さらにイカサマまでして俺に勝ちたかったか？」

「ッ！！！！！！！！」

心臓が止まると思った。この男、俺がイカサマをしたのを気づいて！？

「気づいていらっしやっただんですか……？」

「無論だ、俺様の目を誤魔化せれると思ったか？」

• • • • •

完敗だ。俺は顔を俯く。

「……ありがとうございました……俺は貴方に負けた。」



約束どおり、俺をどこにでも連れていつてくれ。  
売ろうが、タダ働きをさせようが構わない」

俺はどうなるのだろうか？海外に売られるのか？  
それならまだいいな。だがそんなことももう関係はない。

「・・・・・・・・ふん」

男は席を立ち、部屋から出ていこうとする。  
手ぶらの状態で・・・・・・・・手ぶら？

「え・・・・・・・・ちょ、ちょっと、あのケースは・・・・？」

見ると椅子の横には男が持っていたジェラルミンケースが置いたままであった。  
忘れていったのだろうか？

「何を言っている、それはお前が持つものだ」

「え・・・・？」

「まさか、荷物を俺様にわざわざ持たせると言うのか貴様は？」

「・・・・・・・・あ」

それはつまり・・・・・・・・

「俺様の養子になるからには覚悟をしておけ・・・  
それくらいの覚悟はあるのだろうか？」

「・・・・・・・・・・はいッ!!!!!!!!!!!!!!」

この人は・・・・・・・・俺を拾ってくれた。  
俺は真っ先にジェラルミンケースを持ち、その男の後ろについていた。

~~~~~  
~~~~~

「・・・・・・・・少しいですか?」

へりの中で俺は男に聞いた。

「何用だ」

「あんたの名前・・・教えて下さい」

「ふん」

男はぶっきらぼうに、こう答えた。

「地上最強のデュエリスト、

海馬瀬戸だ」

これが、俺と社長との出会いだった。

## 第五話 出会い（後書き）

実際にチェスでイカサマをすることはできません。

チェス盤は小さいのでどうやるかは謎です。

しいて言うなら駒をずらすぐらいしか。

## 第六話 闇を支配する者（前書き）

明けましておめでとございます。

お年玉のお陰で財布の中がウハウハになったへえあです。

さてさて今回もまたまたデュエル。そろそろメリハリつけよう・・・。

そして今回はオリカのオンパレードです。

## 第六話 闇を支配する者

「……」

目の前に広がる白い空間。少なくとも俺の記憶ではこんな場所は知らない。  
なぜ俺はこんなところにいるのだろう。俺は確か天上院とデュエルをしていたはずでは？

「気が付いたか？」

今の状況に混乱していた時、後ろから声がかかった。  
すぐに後ろを向くと、そこにいたのは、

「ッ！俺……！？」

そう、そこにいたのは俺と瓜二つの人物であった。  
身長も、髪も、全て同じであった。ただ、前髪に隠れているためか目はよく見えない。

「ようやくお目覚めってか、俺様の表の人格さんよ?」

俺の声はこんな質なのか…自分からはわからなかった。

「……貴様は一体何者だ?なぜ俺と同じ顔なんだ?ここはどこだ?」

「質問は一つずつにしろよ…まず、そうだな…ここがどこなのかを教えてやろう。」

ここは俺達…いや、お前の中だ」

「俺の、中?」

「人格つつーたらいいのかね?ここはお前という存在の中身なんだよ」

訳がわからない。これが俺の中だとしても、なぜ俺の中に俺がいるのだろう。

「ああ、心配しないでいいぜ?ここにいるお前は意識だけの存在だ。現実のお前は今ベッドでねんねしてるぜ」

俺の考えていることがわかるのか?



「……………」

「そう睨むなつて。さて、次の質問、俺様が何者か…だったな？  
そうだな、簡単に答えると」

俺と同じ顔をしたこいつは、一息間をいれて、言った。

「俺様はお前の裏だ」

裏？

「……………なんだと？俺の裏？それは一体……………」

「おおっと、悪いが話せるのはここまでだ。後は自分で考えること  
だな。」

俺様から話すことはもうねえよ」

そう言つて奴は歩き出した。  
んなことできるか。

「待て。そう易々と逃がすとも思っているのか？」

デュエルディスクを展開し、ホルスターからデッキを出して差し込む。

「お？お前お得意のデュエルってか？」

「……………受けるのか、受けないのか？」

「へへ、おもしれえじゃねえか、相手になってやるよ！」

奴は上に手を翳す。すると手首に俺と同じ、DAのデュエルディスクが装着された。

ただ、俺の白色と違い、奴のデュエルディスクは漆黒。黒かった。

「俺が勝つたら、お前の知っていることを全て話してもらっぞ！！」

「考えといてやるよ」

「くっ、いくぞー！！」

「デュエル（！！）」

京介      LP 4000

京介？    LP 4000

「先行はやるよ」

手をヒラヒラさせ、奴は後攻になることを選んだ。

「そうかい…なら、俺のターンッ！」

いきなりのものでまだ頭が混乱してやがる…冷静になれ、俺！

「俺は《インフェルニティ・ビースト》を攻撃表示で召還！！」

インフェルニティ・ビースト

ATK 1600

「ひゅっ、かわいいわんだこと」

こいつ…

「カードをセット…ターンエンド!!」

京介 手札 4

場 インフェルニティ・ビースト

伏せ 1

まずは出方を見る。こいつがどんなカードを使うか、見させてもらう。

「へへ、俺様のターンッ」

自分とデュエルしている…妙な気分だ。

「お前が使うカード郡…インフェルニティだったか？。  
インフェルニティ（インフェルニティ）  
そりゃ無限と地獄でも合わせてんのかあ？  
なら笑えるぜっ！」

「ふん、その余裕、いつまで持つかな？」

「言ってくれるねえ…こりゃ楽しめそうだ！！  
俺様は手札から、《ダークロード・ナイト タナトス》を召喚って  
ね！」

「ッ！！！！《ダークロード》だと！？」

なんだそのカードは！？名前のニュアンスから、光属性の超レアカードである《ライトロード》の逆ということか？

地面が一部、円を描いて真っ黒に染まる。そしてそこからゆっくりと、まるで死神のようなモンスターが現れた。

右手に刀を持ち、そして印象的なのがその背中。十字架が搔かれた、六角形の、人が入れそうな棺桶がいくつも浮いていた。

その禍々しい姿に、手札を持っている俺の手が震える。  
こんなモンスターがこの世に存在するのか？

「……………!!!!!!」

タナトスは、まるで人間のような雄たけびを發し、その場に君臨した。

ダークロード・ナイト タナトス

ATK 2100

「2100………だと!?!」

俺が奴のモンスターに驚いていると、おかしいことが起きた。タナトスが小刻みに震え始めたのだ。

「おい、お前のモンスターはどうなっている?」

「まあ見てなって……今にわかつからさ」

「く……」

数秒後、そこで信じられないことが起きた。

なんとモンスターが奴の方を向き、そして刀で奴を切ったのだ。

[illegible]

「グアハツ!!!!!!」

京介？  
LP4000  
0

「なッ！！！！！！！！？？？？？」

突然の出来事に俺はさらに混乱した。

それもそうだろう、自分の召喚したモンスターが、自分を攻撃してライフを0にしたのだから。

「つつー。やつぱ堪えるぜ」

だが奴は軽く腹を押さえながら平然と立ち上がった。そしてさらに俺は驚いた。

奴のデュエルディスクから、デッキのカードが全て空中にはじき出されたからだ。

「!?!?!?!?!?!?!?!?!?!」

無数の山札は、奴の少し上後ろで、裏向きのまま停滞した。

「何がなんだかわからねえって顔してやがるな?」

当たり前だ。

「《ダークロード》モンスターの共通の効果:それは《ダークロード》と名の付いたモンスターが場に初めて出た時、プレイヤーのライフを0にしなければならんだよ」

そこがまずおかしい。なぜお前はライフが0なのにまだ負けていないんだ?

「聞けつて。さっきのが第一の効果。そして第二の効果、それが今の俺の山札が全てなくなったのに関係している」

「……」



「《ダークロード》と名の付いたモンスターが初めて場に出た時、自分のデッキを全て墓地に送らなければならない。

そして今後手札にカードを加える効果はデッキからではなく、墓地からカードをランダムに手札に加えるルールに、変更される。

無論、逆に手札を捨てる効果をもつカードが発動させられた場合、墓地に捨てず、デッキに加えてシャッフルするルールに変更されるってな？」

なんてややこしいカード群だ……

「そして俺の墓地のカードが全てなくなった時…俺はデュエルに負ける。

そのかわり墓地のカードが全てなくなる限り、いかなる場合によっても俺が負けることはない!!」

く…。

「…まさに《ライトロード》と間逆だな」

ライトロードは墓地にカードを送る効果…そしてこいつが使う《ダークロード》…。

逆にデッキに戻していくカード…か。

初めに代償<sup>ライブラ</sup>を払い…その見返りとして力を与えるというわけだな。

「さあ、いくぜえ？バトルだ！！」

《ダークロード・ナイト タナトス》で、《インフェルニティ・ビースト》を攻撃！

終焉の詩！！」

奴のモンスターが刀を大振ると、そこから出てきた赤い波動によって俺のモンスターが腐敗し、破壊された。

「ぐッ！」

京介    LP 4000    3500

「ひやははははッ！！デュエルってやつぁおもしろいなあ！！  
相手のもがく姿ってやつは本当にか・く・べ・つだ！！」

奴は踏ん反り返って高笑いし始めた。まともな精神とは思えんな・  
・。

「はははあ！、エンドフェイズ、《ダークロード・ナイト タナトス》の効果により、俺様は墓地からランダムにカードを二枚、デッキに戻す！！」

停滞していた無数のカードから、ランダムに二枚が奴のデュエルデイスクの中に入っていく。

それもライトロードの逆ってわけか……。

「再び《ダークロード・ナイト タナトス》の効果により、デッキの枚数×100ポイント攻撃力がダウンする」

ダークロード・ナイト タナトス

ATK 2100 1900

「おかえりつてな？……ははは！ターンエンドだ！！」

京介？ 残り墓地枚数 33枚

手札 5

場 《ダークロード・ナイト タナトス》

「その笑い、イラつくぜ……俺のターン！」

戦闘ではダメージを負わない…というか0なのだから戦闘は無意味。こいつ相手にデュエルで勝つ方法はただ一つ、耐えるのみ。なんとか粘らなければ…

「俺は手札から、《インフェルニティ・デーモン》を召喚する!!」

インフェルニティ・デーモン

ATK 1800

「……………」

俺の伏せは《全弾発射》……だがこいつとのデュエルでは無意味になってしまった……。

しかしこの伏せは奴を警戒、まだブラフとして使える！

「さらに魔法カード、《手札抹殺》を発動！互いのプレイヤーは手札を全て捨て、その枚数分デッキからドロースる！」

俺は手札4枚を捨て、そしてデッキから4枚ドロースる。

「俺は《ダークロード・ナイト タナトス》の効果により手札をデ

ツキに加える・・・

そして墓地より5枚、カードをランダムに手札に加える」

奴は手札をデッキに加えると、空中に浮いている5枚のカードがランダムに奴の手札に納まる。

これで奴のデッキ残り枚数は28枚・・・。そしてデッキにカードが戻ったことにより・・・。

【・・・・・・・・・・・・・・・・・・】

タナトスの周りに黒い霧が発生し、それによってタナトスが苦しみました。

「やってくれるねえ・・・《ダークロード・ナイト タナトス》の効果、攻撃力は500ポイントダウンだ」

ダークロード・ナイト タナトス

ATK 1900 1400

よし、これで俺のモンスターが奴のモンスターの攻撃力を上回った！。

「バトルだ！！、《インフェルニティ・デーモン》で、《ダークロ

ード・ナイト タナトス》を攻撃！  
ヘルプレッシャー！！」

巨大な魔方阵より出た炎手によってタナトスが押しつぶされる。

京介 L P 0

「おつと痛い痛い・・・だが俺にはダメージはねえぜ？なんたつてライフがねえんだからなあ？」

んなことはわかってるさ。

「カードを三枚セット！、ターンエンド！」

京介 手札 二枚

場 インフェルニティ・デーモン

伏せ 3

「へへ、俺様のターン！」

奴は腕を上に見せる。そしてその手に一枚のカードが収まる。

これが奴のドローなのだろう。すると奴はいきなりクスクス笑い始めた。

「ククク、どうよ？自分と戦っている感じってのはさあ？面白いだろあ？」

「・・・・・・・・」

「そう睨むなよ、俺達は一心同体、表と裏、右翼と左翼。切つても切れねえ仲なんだからよ、もっと親しくしようぜ？」

こいつの言っている意味はよくわからないが・・・・関係はない。俺はこいつを倒すまでだ。

俺は奴の言葉に反応せず、ただ睨む。

「なんか反応ねえのかよ・・・・おつもしろくねえなあ・・・・手札から魔法、《ムーン・エクステンジ》を発動！」

手札をから《ダークロード》と名の付いたモンスターをデッキに加え、そして墓地からカードを二枚、ランダムに手札に加える！」

さしあたり《ソーラー・エクステンジ》のダークverってところか。

「俺様は《ダークロード・ネクロマンサー　ドリュアス》を捨て、墓地よりカードを二枚手札に加える」

ドリュアス……美しい男性や少年に対しては緑色の髪をした美しい娘の姿を現し、相手を誘惑して木の中に引きずり込んでしまう、ギリシア神話に出てくる精霊……。

タナトスといい、ドリュアス……どうやら《ダークロード》のカード群は神話を元にした名前らしい。

「へん！……さらに、《ダークロード・ソーサラー　メーディア》を守備表示で召喚！！」

ダークロード・ソーサラー　メーディア

D F E　1 7 0 0

仮面を被り、異様に手足が細い女性の体型のモンスターが現れる。メーディアも同じく、ギリシア神話に出てくる王女だ。



「カードをセット・・・エンドフェイズにより、《ダークロード・ソーサラー　メーディア》の効果により、墓地より3枚、カードをデッキに戻す！」

またもや墓地からカードがデッキに戻る。だが奴はデッキに戻るカードの一枚を見て笑う。

「おつ、こいつは運がいいぜ！、俺はデッキに戻った《ダークロード・バーサーカー　ヘーラクレース》の効果発動だあ」

デッキに戻ったはずのカードが一枚、奴のデュエルディスクに納まる。

そしてフィールドに目が紅く染まった黒い巨人が現れた。

「《ダークロード・バーサーカー　ヘーラクレース》は、墓地からデッキに戻った場合、フィールドに特殊召喚することができんのだ！」

ダークロード・バーサーカー　ヘーラクレース

ATK 2100

これで奴の場にはモンスターが二体・・・まずいな。

「ターンエンド、くく、足掻けよ?」

京介? 残り墓地枚数 22枚

手札 4枚

場 ダークロード・ソーサラー メーディア

ダークロード・バーサーカー ヘーラクレース

伏せ 1

ダークロード・・・効果が複雑故に対処しにくいな・・・。

そもそもM&Wのルールである「4000のライフポイントを0にしたら勝ち」がないのはきつい。

デッキが0になったら負けるルールも奴にとっては無意味、逆に助けてしまうことになる。

どうしたものか・・・・・・。

「・・・俺のターン!」

だが迷ってては意味がない。今はこいつを倒すことだけに集中しろ!

「ドロー!」

引いたカードは……よし！」

「俺は《インフェルニティ・ネクロマンサー》を守備表示で召喚！」

骸骨の魔術師が俺の場に現れる。こいつを出すのは初めてか？

インフェルニティ・ネクロマンサー

DFE 2000

「さらにリバースカードオープン！、《全弾発射》！俺の手札を全て墓地に送り、その枚数×200ポイントのダメージを相手に与える！」

「ひゃーははははは！！俺様にダメージなんて関係えねえって知ってるだろお？ついに頭いかれたか！？」

ダメージが目的じゃねえよ、俺の目的は……ハンドレスだ！

「このカードによって俺の手札は0……！よって、《インフェルニティ・ネクロマンサー》の効果発動！！」

「あ？」

「自分の手札が0枚の時、1ターンに一度、俺の墓地に存在する《インフェルニティ》と名の付いたモンスターを一体、特殊召喚することができる！」

《全弾発射》を使ったのはこのため。運が悪いことに、手札のカードは全てモンスターカードだったのだ。

「なあるほど・・・それが真の目的かぁ・・・・・・・・・・ははっ！」

「・・・・・・・・（なんだ？奴の笑みは？）・・・俺は効果によって、墓地から二体目の《インフェルニティ・デーモン》を召喚する！」

墓地より二体目の《インフェルニティ・デーモン》が出現する。ここまででは順調・・・大丈夫だ、問題ない。

「そして特殊召喚された《インフェルニティ・デーモン》の効果発動！！

手札が0枚の時にこのカードが特殊召喚されたとき、デッキから《インフェルニティ》と名の付いたカードを一枚、手札に加える！！俺は・・・・・・・・《インフェルニティ・フォース》を手札に加える

「！」

デッキから一枚のカードを手札に加え、軽くシャッフル。

そうだ、よく考えてみる……。俺は戦闘をしなくていいんだ。奴のデッキが切れ……。っと、墓地が切れれば俺の勝ちなんだ。ならば耐えればいいだけ。

「カードをセット、そしてリバースカードオープン！！《インフェルニティ・プレッシャー》！」

このカードならば……。！！奴の戦術を全て無効化出来る！！  
《インフェルニティ・プレッシャー》が場に出たことによって奴のモンスターが苦しみ出す。

ダークロード・バーサーカー    ヘーラクレース

ATK    2100    1800

ダークロード・ソーサラー    メーディア

ATK1000

「あん？俺様のモンスターが？」

奴は自分のモンスターの攻撃力が減ったことに疑問を抱いているようだ。

「《インフェルニティ・プレッシャー》の効果……それは自分の場の《インフェルニティ》と名の付いたモンスターの数×100ポイント、相手のモンスターの攻撃力をダウンさせる……！  
さらに、このカードが存在するかぎり、《インフェルニティ》と名の付いたモンスターは戦闘では破壊されない……！」

「ち……………めんどくせえ……！」

お、初めて表情を崩したな？

「ただこのカードが場に存在している限り俺はお前に戦闘ダメージを与えることができないが……………まあ、お前には関係ないだろう？」

ライフを削る必要がないため、このカードはお前と相性最悪ってわけだ。

さあ、攻めるぜ？

「行くぞ、バトルだ……！《インフェルニティ・デーモン》で、《ダークロード・ソーサラー　メーディア》を攻撃……！  
ヘルプレッシャー……！」

「させるかよお!!、トラップ発動!!《攻撃の無力化》!!この効果によって、バトルフェイズを終了させるぜえ!!」

紋章から出た腕は渦のようなものに巻き込まれ、消えていった。

「くそ……………だがもうお前は終わったも同然だ、ターンエンド!」

京介 手札0

場 インフェルニティ・デーモン×2

インフェルニティ・ネクロマンサー

伏せ 1

インフェルニティ・プレッシャー

「こんくらいで勝った気になってんじゃねえぞ……………?俺様のターン……………」

それは俺も解っている。この程度で奴を攻略できるとは思っていない。  
事実、《インフェルニティ・プレッシャー》が破壊されれば、俺は危うくなる。

（だが……）

俺の伏せの二枚……その中の一つ、《インフェルニティ・フォー  
ス》は、相手の攻撃宣言時にそのモンスターを破壊して、墓地より  
モンスターを召喚する効果だ。

墓地には鉄壁の《インフェルニティ・ガーディアン》がいる。もし  
《インフェルニティ・プレッシャー》が破壊され、攻撃されてもま  
だ手は残っている。

そしてさらにもう一枚の伏せ……それは《インフェルニティ・ブ  
レイク》。

墓地の《インフェルニティ》と名の付いたカードを除外して、フィ  
ールドのカードを一枚破壊する効果だ。

もし何らかでこの二つが破壊されたとしても、まだこのカードがあ  
る。つまり、戦闘耐性、攻撃耐用、破壊可能の三拍子が今俺が出来  
ること。

さあ来い……！！。

「ドロー……はんっ！俺は《ダークロード・ソーサラー　メー  
ディア》を守備表示から攻撃表示に変更し、効果を発動！！」



む？

「このカードが守備表示から攻撃表示に変わった時……そのターンに一度だけ、相手の発動した魔法、罠の効果を無効にし、破壊することが出来る！！」

なッ！？

「はははははッ！！！！！！……どんな戦術を考えていたのかは知らねえけどよお？俺様にはそんな無意味なんだよ！！  
そしてえ！！、《ダークロード・バーサーカー ヘーラクレース》  
を生け贄にい！！」

いきなり吹き出した漆黒の霧がヘーラクレースを包み……………

「絶望を示せえ！！来い！！」

やがてその霧はヘーラクレースをすっぽり包み込み、丸い球体と変化する。

「《ダークロード・デビル ルシファー》 ああ！！！！！！」

「……………っ！！！」

そして霧球体の中から大きな、漆黒の翼が生えてきた。  
だんだん黒霧が無くなり、中から紫の体をした、頭に2本の大きな  
角を生やした堕天使が現れた。

ダークロード・デビル ルシファー

ATK 2500

【……………、……………、……………、……………】

こいつ、笑ってやがる……………。

ルシファーは俺を見て小さく笑ったのだ。

「ははは！！！！、こいつもお前を倒すのが楽しみなんだよお！！！！」

神に反逆し、結果天界を追放、つまり堕天された神、それがルシフ  
アー……………。

「そしてえ！、《ダークロード・デビル ルシファー》の効果が発  
動ッ！！！」

くらえやぁ！！明けの明星イツ！！！！！！！！」

ルシファーは両腕を左右に広げた。するとその手のひらに漆黒の弾が作成され、それを俺のフィールド目掛けて投げつけてきた。

「ぐああああッ！……！」

凄まじい衝撃が俺を襲い、フィールドを見ると………何！？

「デーモンと伏せ一枚だけだとッ？一体何がッ！？」

俺の場には《インフェルニティ・デーモン》一体と、伏せた《インフェルニティ・ブレイク》しか残っていなかった。

「ひやはははっ……！《ダークロード・デビル ルシファー》の効果、それは《ダークロード》と名の付いたモンスターを生け贄に捧げてこのモンスターを召喚した場合！、

墓地のカードを5枚ゲームから除外することで、相手フィールド上のカードが二枚になるように破壊することができるのさあ……！」

「……………ぐう、マジかよ……………」

おそらく《ライトロード・エンジェル ケルビム》の逆verだろ

うが、なんだその鬼畜効果は！！

場のカードが二枚になるように破壊するとは……これはやばいぞ。

「俺様はコストによって墓地よりカードを5枚、ゲームから除外する……ひやははは！！、続けていくぜ！？」

バトルだッ！！《ダークロード・デビル ルシファー》の攻撃！！食らえや！！ハルマゲドンッ！！！！」

「！！」

地面から亀裂が入り、そこから紫の光が指してき、

「ッぐああああッ！！！！」

まるで業火の中にいるような、凄まじい熱気が俺に襲いかかった。

【……………】

デーモンはその業火に耐えきれず蒸発してしまう。すまない……………デーモン。

京介 LP3500 2800

「…………ちい！」

その痛みに耐えきれず膝をつく。

「ひやはははははははッ……………！……！……！地獄の業火の味はどうですかあゝ！？」

「……………ッ」

まずい……………な。

「続けて《ダークロード・ソーサラー　メーディア》の攻撃だあ、ほら行け、！蛇遣いの術！！」

仮面より飛び出してきた蛇が俺に噛みつく。

「ッ……………」

京介 LP2800 2700

「はあ……………はあ……………」

まずい……………な。俺の場には罠の《インフェルニティ・ブレイク》のみ。手札も0……………。

「……………」

そして奴の場には攻撃力2500のモンスター……………。

「ほらほらあ？こんなところで倒れんなよ？立て立て？」

「……………」

俺は……………勝てるのか？こいつに？

京介 LP2700

手札 0

場

伏せ 1

.....

京介？ 残り墓地枚数 16枚

手札 4枚

場 ダークロード・ソーサラー メーディア

ダークロード・デビル ルシファー

## 第六話 闇を支配する者（後書き）

### 【ダークロード】

「遊戯王」無限の地獄」六話で登場した「ダークロード」と名のついたモンスター群。

全てのモンスターが闇属性で統一されており、その多くが墓地からカードをデッキに戻す効果やそれに関連した効果など、異様な持っている。

名前からして【ライトロード】と何らかの関係がありそうだが、今のところ不明。

現在のところ、京介の闇？が使用した5種類のダークロードが以下の共通する誘発効果を持つ。

「ダークロードと名の付いたモンスターが、デュエル開始時に初めて自分フィールド上に表側表示で召喚、特殊召喚、反転召喚された時、自分のライフポイントを0にしなければならない。

さらに自分のデッキを全て墓地に送り、今後デッキから手札に加える公式ルールは墓地からランダムに手札に加えるルールに変更される。

このときプレイヤーは負けにはならず、墓地のカードが全て無くな



った時点で負けとなる。

自分のエンドフェイズ毎に、墓地からカードをランダムにX枚デッキに戻してにシャッフルする。

## 第七話 断罪（前書き）

正直に言います。この小説の存在を忘れていました。

楽しみにしてた方、ごめんなさい。

あと、《インフェルニティ・ガン》の効果が、現実と一緒にでは壊れカードになってるので、弱体化させました。  
2体 1体のみ

3月25日 プレイミスを発見してしまいました。  
ちゃんと確認して投稿するべきでしたね…。

今現在、この展開を修正するオリ力を考察中です。  
なのでしばらくは修正することが出来ません。  
しばらくお待ちください。

楽しみにしていた読者の皆さん、本当に申し訳ありませんでした。  
このような誤字脱字ミスが多い作品を見せてしまった…。

## 第七話 断罪

「……ドローッ」

「お？ まだやれる気力があつたか！ そうこなくちゃなあ」

うつせえ、主人公がこんなところで負けるはずねえだろ。  
俺はドローしたカードを見る。

(…《インフェルニティ・ミラージュ》か)

自身をリリースする事によって墓地から《インフェルニティ》と名のついたモンスターを二体召喚する効果を持つこのカード、  
当たりと言えば当たりなのだが…。

「……………攻撃力2500…」

そつ、相手フィールドで俺を睨んでいる奴のルシファアは攻撃力が2500なのだ。よつて現時点俺の低火力デッキ内でこの攻撃力を超えるモンスターはいない。

《インフェルニティ・ミラージュ》でいくらモンスターを召喚しようが破壊されるのは目に見えている。

唯一凌ぐことの出来る可能性としては《インフェルニティ・ガーデ  
イアン》だが、生憎今墓地にはそのカードはない。  
仮に召喚できたとしてもそれで何ターン持つか……。

…ここはデッキと墓地とで相談だな。

「俺は、《インフェルニティ・ミラージュ》を召喚！」

西洋人形のようにそうでないモンスターが現れる。ぶっちゃけキモ  
イ。さっさとご退場願おう。

「そして自身の効果を発動！ このカードをリリースし、墓地より  
《インフェルニティ》と名のついたモンスターを二体、特殊召喚す  
る！」

なぜか反応したデュエルディスクから、《インフェルニティ》のカ  
ード郡が取り出される。

とは言ってもあるのは《インフェルニティ・デーモン》×2《イン  
フェルニティ・ネクロマンサー》《インフェルニティ・ビースト》  
のみ。

必然的に選べられるのはこの二枚だ。

「俺が蘇生するのはこの二体！！ 現れろ、《インフェルニティ・

デーモン』！《インフェルニティ・ネクロマンサー》！」

「け、粘るねえ」

考えればまだ手はある。慎重に行け、俺。

「《インフェルニティ・デーモン》が特殊召喚され、尚且つ手札が0枚の事で効果発動！！デッキより《インフェルニティ》と名のついたカードを手札に加える」

俺はデュエルディスクよりデッキを取り、全体的に眺める。

(…ここでの選択が重要になってくる)

数々の《インフェルニティ》からどのようなコンボをすることで奴を倒すことが出来るだろうか。

「……………」

一応伏せてある《インフェルニティ・ブレイク》はまだある。この効果を使えば奴の《ダークロード デビル・ルシファー》を倒す事は容易だろう。

だが……

「へっへっへっへ……」

あの男がそれに気付いていないはずがない。おそらくなんらかの策があると考えていいだろう。

しかし今奴の場に伏せカードはない、つまり……

（ルシファーが破壊されても別に構わないって事か）

まだ手札は4枚あるんだ、あれを越えるモンスターが現れても不思議ではない。

だとするとそれも想定して選ばなければいけない。

「《ビースト》…ダメ、《ドワーフ》…ダメ、《ブレイク》…ダメ  
………む？」

これは……そうか！！ このカードがあつた！！ とすればこの効果でアレをああすれば……

頭の中でコンボが繋がっていく。そしてその繋がった先は、

（勝利！！！！）

「俺が手札に加えるのは《インフェルニティ・ガーディアン》！！」

俺はデッキから一枚抜き取って相手に見せた。

「壁モンスターで来たかよ…んでも忘れてないよなあ？ お前はもうこのターンの召喚は済ましてんだぜい？」

「わかっている…そう焦んなよ。さらに、《インフェルニティ・ネクロマンサー》の効果発動！ 墓地より、二体目の《インフェルニティ・デーモン》を召喚する！！」

勝利への軌跡…その目でしかと見る！

「《インフェルニティ・デーモン》の効果発動、再びデッキから持ってくるカード…それは！！」

シュツと再び一枚のカードをデッキから抜き取る。  
そのカードは、

「《インフェルニティ・ガン》！！！！！！」

「いんふえるにてい…がん？」

ふふん、貴様はこのカードの効果を知らんだろつ、この無茶苦茶な効果を。

「俺は永続魔法、《インフェルニティ・ガン》の効果発動！！ 1 ターンに一度、手札の《インフェルニティ》と名のついたモンスターを墓地に捨てることができる。

俺の手札は《インフェルニティ・ガーディアン》のみ。よってこのカードを捨てるぜ」

「はん、そんだけかよ。んなカードディスアドバンテージの塊じゃねえか。一体なんの意味があるってんだ？」

「おおつと、効果がこれだけと思っちゃいけないぜ？」

「…ああ？」

「本命はこつちさ！！ 俺は《インフェルニティ・ガン》の第二の効果を発動！！

このカードを墓地に送ることで、墓地に存在する《インフェルニティ》と名のついたモンスターを一体、特殊召喚する！！」



「  
…  
ち  
い  
」

「俺は《インフェルニティ・ガン》を墓地に送り…墓地より現れる、  
《インフェルニティ・ガーディアン》!!!」

骸骨とうじょーう！！ 勿論守備表示だぜ。

「さらにリバースカードオープン！！ 《インフェルニティ・ブレイク》！ 墓地にある《インフェルニティ・ビースト》を除外し、」

ピツと、俺は《ダークロード・デビルルシファー》を指差す。

「そのきしよいモンスターを破壊する!!」

「…!!!」

[illegible]

とても人間とは思えない……いや、人間じゃねえか。文字通り悪魔の悲鳴を挙げながら、奴のモンスターは塵になった。

「バトルだ！ 一体目の《インフェルニティ・デーモン》で、《ダイクロード・ソーサラー・メーディア》を攻撃、ヘルプレッシャー！」

つしゃあー！！ 全滅！ でもまだ終わりじゃないよん！！

京介LP 0 0

「つう…はあー！！！！ 俺にはダメージは関係ねえーよ！！！！」

「わあーてるさ、だからただの嫌がらせだ」

「ああ！？」

「二体目の《インフェルニティ・デーモン》でダイレクトアタック！！ ヘルプレッシャーVer.2！！」

勝手に命名。デーモンもなにやら格好つけているようなので満更でもなさそうだ。

「ぐうおおおおおおおッ」

京介 L P 0 0

「LP無くても痛みくらいはあんだろ!! どや!!??.?」

手札0の状況から四体も場に並べることが出来た。  
しかもシュミレーションどおり《インフェルニティ・ガーディアン》  
《もいる事から、あとは時間稼ぎでいいだろう。

「…つぜえなあ…」

「お?」

「つぜえよ…ご主人様よー? 何いい気になってやがる…調子のん  
じゃねえよ…」

「…ターンエンド」

少し興奮しすぎたみたいだ。冷静になれ、俺。クールに、だ。

京介 LP2700

手札 0

場 インフェルニティ・デーモン×2

インフェルニティ・ネクロマンサー

インフェルニティ・ガーディアン

伏せ 0

「舐めんなああああああッ！！！！ 俺様のターン！！」

「っ！！こええ」

「ルシファー」ごときを倒して喜んでんじゃねえよ…俺にはまだ切り札があんだよ」

「…やはり、か」

「俺様はあ！！ マジック発動！！ 《極限の絶望》！ 相手のライフポイントが自分のライフポイントより5倍以上多い時に発動する事が出来る！！」

「5倍以上少ない時だ！？ 貴様のライフは0のはずじゃ…ってああああああ！！！！！！」

…まさか、0×5＝0だって言いたいのか。せこいぞ！！！！

「この効果により俺様は墓地からカードを5枚、デッキに戻す…」

？ 自分で自分の墓地を削るのか…？

「《極限の絶望》の効果…それはデッキから墓地のカード枚数×100の攻撃力以下のモンスターを手札に加えることが出来るのさあ…」

「なん…だと!？」

「現在の墓地のカードは残り10枚…よって俺は攻撃力1000以下のこのモンスターカードを一枚、手札に加える!!」

…くそ、ここからじゃよく見えないな…。

「…くつくつくつく…てめえに地獄を見せてやるよお…」

「……………」

「デュエル中、一度でもフィールドに出た《ダークロード》モンスターが5体以上の時!!、そのカードを全て除外することでこのカードを特殊召喚する!!」

奴のデッキ、墓地から5枚のカードが排出された。

「俺様は、

《ダークロード・ナイト タナトス》!!

《ダークロード・ネクロマンサー ドリュアス》!!

《ダークロード・ソーサラー メーディア》!!

《ダークロード・バーサーカー ヘーラクレス》!!

《ダークロード・デビル ルシファー》

を除外し、  
」

奴が一枚のカードを上に乗せる。

「闇道の闇に飲まれるがいいッ！！  
現れる！！  
《断罪の龍》！！」  
コンビクシヨザラゲーン

「断罪…の龍！？…うお！！」

白い空間に突如裂け目が現れ、そこから紫の目がこちらを覗いている。

【

】

「ッ！！…っう！！！」

何か喋った…あの龍は何かを喋った！！　しかしその言葉はもう言葉ではない。

次元が違う。人間には聞けない、聞き取る事さえできない『音』だった。

やがて裂け目から勢いよく、巨大な『何か』が飛び出してきた。

【

】

相変わらず理解できない、その意味を考える事さえできない『音』を発しながらその龍はフィールドに『君臨』された。

## 《断罪の龍》

ATK Ⅱ §

「…攻撃力が…」

「へっへっへっへ！！　てめえら人間ごときじゃあ、こいつの攻撃力さえ理解出来ねえよ！！！」



「…………お」

もしこの世に悪魔というものがいたら…そんな生易しい考えじゃだめだな。

暗く、漆黒の霧に隠れてその龍は姿を確認できないが、その中で光る二つの眼光、それを見ているだけで震えが止まらなかった。

「…恐怖で竦み上がってやがるなあ？　そうだよそれでいいんだよ…俺様は《断罪の龍》の効果を発動！！」

「……………く！！」

「

」

「う…うおおおおおおおおおおあッ……………！！！！！！！！！！」

京介      LP2700      0

俺の心に

闇が生まれた。

•

## 第七話 断罪（後書き）

### 《断罪の龍》闇

???族 効果

『Despair in all living things and the conviction I exist. arise by servants in the under

Let's esteem their intentions.

Power is given the person who cuts down the life of ten for me.

Power to annihilate the enemy, and power to destroy the hords  
e from the space and power to  
cut down all lives

ATK ㄱ / DFE ㄱ §

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2610p/>

---

遊戯王GX ～無限の地獄～

2011年10月7日18時06分発行